

# 教育研究業績書

2020年10月27日

所属：看護学科

資格：教授

氏名：藤田 優一

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	小児看護学
学位	最終学歴
博士（看護学）	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. オンデマンド配信授業、ライブ配信授業、対面授業を組み合わせたハイブリッド型授業の展開	2020年9月～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学概論」（専門科目、1年次配当、必修1単位）において、オンデマンドで動画を配信し、確認用の小テストをGoogleフォームを用いて実施した。その翌週に、ライブで講義の質問への回答や前回のオンデマンドで配信した講義動画のダイジェストを説明した。また、講義の後半ではグループワークと対面授業を行い、遠隔授業で学んだ内容をもとに学生間で討議を行った。
2. ライブ配信型授業で学生とともに考えながら展開する看護過程の実施	2020年6月～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「チャイルドデベロップメンタルアプローチ」（専門科目、3年次配当、必修1単位）において、ライブ配信型授業で学生とともに考えながら疾患を有する小児の事例をもとに看護過程を展開した。web上のルーレットを画面で共有しながら、ルーレットであたった学生は考えや意見を述べながら、教員と全学生と一緒に看護過程を展開し、思考過程について教授した。
3. オンデマンド動画配信とライブ配信によるハイブリッド型遠隔授業の実施	2020年4月～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「疾病治療概論」（専門科目、1年次配当、必修2単位）では、オンデマンドで動画を配信し、その後、ライブで講義の質問への回答や前回のオンデマンドで配信した講義動画のダイジェストを説明した。学生からはライブ配信があったことで分かりやすかったと高評価であった。
4. ICTを活用したGoogle Classroomの小テストと講義動画の視聴、予習課題の実施	2019年4月～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「疾病治療概論」（専門科目1年次配当、必修2単位）にて、毎回の講義前に予習課題をしてから授業に参加し、講義後はGoogle Classroomを使用して、スマートフォンまたはパソコンから小テストとして国家試験の過去問を回答することを実施している。また、補足の講義動画をアップロードすることで、学生が授業時間外で視聴できるようにした。学生からは「予習をすることで授業の理解がしやすかった」「小テストで復習して振り返りができた」などの意見がみられた。
5. 国家試験としての災害看護学講義の実施	2019年10月～現在	武庫川女子大学看護学部「災害看護学」（特別教育科目、4年次配当）において、YouTubeの災害に関する動画を用いながら、災害看護学の概要と国家試験で頻出する問題の説明を行った。
6. 卒業演習でのICT（Google Classroom）を活用した指導	2018年8月～現在	武庫川女子大学看護学部演習科目「卒業演習」（専門科目、4年次配当、必修2単位）では、ゼミでGoogle Classroomを使用して、文献検討を行った。Google Classroomに文献検討の課題をアップロードして、学生は自宅のパソコンから課題を作成し、Google Classroomにアップロードした。ゼミの前に教員がアップロードされた資料を指導した後に印刷してゼミで配布して授業を行った。
7. 「看護研究方法」でのクリティークの実施	2018年4月～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「看護研究方法」（専門科目、4年次配当、必修2単位）では、量的研究の講義で、学生は先行研究の論文を用いてグループワークをしながらチェックリストに沿ってクリティークをし、全体で発表をした。
8. 大学院修士課程「看護統計法」での統計ソフトEZRを使用した演習型授業の実施	2018年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科修士課程1年次講義科目「看護統計法」において、相関、t検定、カイ2乗検定の講義を行った。その後、無料統計ソフトEZRを大学院生の各自のパソコンにインストールし、教員が書いた研究論文とそのデータを大学院生へ提供し、論文の結果と同じ値になるように分析の練習を演習形式で実施した。
9. 臨地実習でのカンファレンスの方法の講義と実践	2017年9月～現在	武庫川女子大学看護学部演習科目「初期演習」（専門科目、1年次配当、必修1単位）で実施した。臨地実習でのカンファレンスの方法について講義を行い、架空の事例である「高齢者へのペースメーカー」について、事例の問題はどこにあるのか、看護師としてどのようにすればよいのかについて3～4名グループに分かれて30分間カンファレンスを行った。司会、書記、発表者を決めて、カンファレンスの後にその話し合った内容について発表をもらった。
10. レポートの書き方の講義と作成したレポートの他者評価の実施	2017年9月～現在	武庫川女子大学看護学部演習科目「初期演習」（専門科目、1年次配当、必修1単位）で実施した。

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
11. 上級生の看護学演習に参加	2017年9月～現在	レポートの書き方の基本について講義を行った。その後、学生はレポート提出用チェックリストをもとに「看護師はなぜ身だしなみを整えなければならないのか」の課題についてレポートを作成した。提出されたレポートを匿名化し、レポート提出用チェックリストをもとに他の学生がレポートの評価を行い、後日その評価を学生へ返却した。学生は、自身のレポートが他者に読まれ評価される、評価するという経験からレポートの書き方について深く学ぶことができた。
12. アルバイトのプレゼンテーションの講義と実践、スマートフォンのクリッカーを使用した匿名他者からの評価の実施	2017年9月～現在	武庫川女子大学看護学部演習科目「初期演習」（専門科目、1年次配当、必修1単位）で実施した。看護学を学ぶことについての動機づけとして、1年生が2年生の演習に参加し、見学した。小児のバイタルサイン測定、点滴の刺入と固定、採血、など上級生が学ぶ姿を見ることで、学習への動機が高まったという意見が多くみられた。
13. 看護計画の展開（PBL）でのループリックを使用した他者評価の実施	2017年4月1日～現在	武庫川女子大学看護学部演習科目「初期演習」（専門科目、1年次配当、必修1単位）で実施した。パワーポイントを使用したプレゼンテーションの練習と実践をするために、まずはスライドの作り方やプレゼンテーションの基本について講義を行った。その後、現在しているアルバイト毎のグループに分かれて、自身のアルバイトの紹介、やりがい、将来どのように役に立つかなどについてスライドを作成し、4分間で発表した。発表を聞く学生は、スマートフォンで操作するwebアプリのクリッカー“Clica”を使用して、匿名での評価を行った。学生はただ発表するだけでなく、他者からの評価があるために、積極的に取り組むことができた。
14. 文章の書き方とまとめ方についての講義とピア評価の実施	2017年4月1日～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「チャイルド・デベロップメンタル・アプローチ」（専門科目、3年次配当、必修1単位）で実施した。事例を用いて小児の患者と家族を対象とした看護過程の展開で、講義の最終回に関連図、問題明確化、看護計画の立案を他のグループが匿名で評価を行った。評価をする際には、ループリック形式の他者評価票を使用した。他のグループの学生が理解できる内容とするために、具体的にどのような関連図、問題明確化、看護計画とする必要があるのかを意識させながらグループワークを実施できた。
15. 教員へのアポイントメントのとり方の講義とプレゼンテーションの実施	2017年4月1日～現在	武庫川女子大学看護学部演習科目「初期演習」（専門科目、1年次配当、必修1単位）で実施した。情報を客観的にとらえてまとめる方法について学ぶために前半は講義を行った。授業の後半では教員が絵本の物語や「忘れられない看護エピソード」を朗読し、学生はその内容について客観的に情報をまとめて感想を書いた。感想は学生同士で交換してピア評価を行った。学生からは「たくさん書けばよいというものではなく、必要なことを簡潔に書くことが大事だとわかった」などの意見がみられた。
16. 「大学生としての勉強方法」についてのプレゼンテーションの実施	2017年4月1日～現在	武庫川女子大学看護学部演習科目「初期演習」（専門科目、1年次配当、必修1単位）で実施した。学生は教員へのメールの送り方、研究室訪問の方法、インタビューの方法を講義を受け、その翌週に教員にアポイントをとってインタビューをし、その内容を学生全員の前でプレゼンテーションを行った。学生はメールや訪問時のマナー、プレゼンテーションを実践することができ、看護学部の教員についても知ることで理解が深まった。
17. 「大学生としての勉強方法」についてのプレゼンテーションの実施	2017年4月1日～現在	武庫川女子大学看護学部演習科目「初期演習」（専門科目、1年次配当、必修1単位）で実施した。学生は大学生の勉強の方法について書かれた資料を配付され、翌週までにそれらの内容についてまとめたプレゼンテーション資料を作成して、4名1組のグループ内でプレゼンテーションを行った。学生からは「高校までの勉強方法では通用しないことが分かった」「丸暗記ではなく、毎日の予習と復習が大事だ」などの意見がみられた。
17. 大学院博士課程「看護エビデンス特論」での対話型授業の実施	2017年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科博士課程1年次講義科目「看護エビデンス特論」において、デルファイ法の概念と研究方法の実際についての講義の後、その応用可能性について博士課程の大学院生と対話をしながら深めていく授業を実施した。
18. スマートフォンで撮影した動画で振り返りを行う小児のバイタルサイン測定の実施	2016年9月1日～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）で実施した。小児のバイタルサイン測定の演習では、測定時の学生の表情や声かけが客観的に理解できるように、ベッド上にスマートフォンのスタンドを置いて動画を撮影した。子どもがどのような視点でバイタルサインを測定されているのか、学生はどのような表情で声かけをしているのかが分かり、学生からは「測定することで精一杯で声かけが十分にできていなかった」「顔がこわばっていたので、もっと

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
19. 患児の事例に合わせたおもちゃの制作	2016年9月1日～現在	笑顔が必要だった」という意見があった。 武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）で実施した。遊びと読み聞かせの演習では、6つの患児の事例から1つを選択し、患児に合わせたおもちゃを制作した。おもちゃは空き容器、ペットボトル、牛乳パックなどを使用して低コストで作成できることを条件とした。学生は、授業の時間内に工作を行い、完成したおもちゃの写真をレポートに添付して、使用方法や作成の意図などを書き提出した。
20. スマートフォンで撮影した動画で振り返りを行う絵本の読み聞かせの実施	2016年9月1日～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）で実施した。遊びと読み聞かせの演習では、前回の講義で習った絵本の読み聞かせの方法を実践するために学生間で絵本の読み聞かせを行った。ただ読み聞かせをするだけでは、自身がどのような声色、スピード、表情で読んでいるのかが理解できないため、学生はスマートフォンで動画を撮影し、自身で動画をみながら振り返り感想を書いた。学生からは「思っていたよりも早口で読んでいたので、気をつけたい」「読むことに集中していて表情が硬かった」などの意見がみられた。
21. 看護計画の展開（PBL）でのプレゼンテーションの実施	2016年9月1日～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）、「チャイルド・デベロップメンタル・アプローチ」（専門科目、3年次配当、必修1単位）で実施した。小児の患者と家族を対象とした看護過程の展開では、グループワークでまとめた関連図、問題明確化、看護計画の立案について、学生がプレゼンテーションを行った。時間が限られているため、発表するグループは当日のくじで決定した。プレゼンテーション10分、質疑応答5分として、発表が当たらなかったグループも司会やタイムキーパー、質問をするようにした。
22. 自己評価ルーブリックを使用した看護計画の展開（PBL）の実施	2016年9月1日～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）、「チャイルド・デベロップメンタル・アプローチ」（専門科目、3年次配当、必修1単位）で実施した。小児の患者と家族を対象とした看護過程の展開をする際に自己評価ルーブリックを使用した。グループワークの各回の振り返りとしての自己評価をする際に、ルーブリックで望ましい学習熟度を具体的に示した。このことで、学生は毎回の授業でどのように取り組めばより高評価になるかが具体的に理解でき、教員との共通理解を深めることができた。
23. ジグソー法を取り入れた看護過程の展開（PBL）の実施	2016年9月1日～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）、「チャイルド・デベロップメンタル・アプローチ」（専門科目、3年次配当、必修1単位）で実施した。小児の患者と家族を対象とした看護過程の展開の際にジグソー法を取り入れた。4名1グループの編成となり、学生は4つのアセスメントをそれぞれ担当する。担当したアセスメント同士の学生で集まり、エキスパートグループでグループワークをしてアセスメントをまとめる。もとのジグソーグループに戻って自身が担当したアセスメントについて他のメンバーへプレゼンテーションをする。4つのアセスメントを統合させて相談しながらグループワークを進めて、関連図の作成、問題明確化、看護計画の立案をする。4名1グループと少人数制にすることで全員が参加でき、担当があることで学生各自が責任を持ってグループワークを実施している。
24. 事前課題としてのインターネット上の動画の視聴	2016年9月1日～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）で実施した。小児の点滴固定の演習では、教員が制作した点滴固定の動画をweb上にアップロードし、学生は事前課題として動画を視聴して手順を図にまとめ、演習当日に実施する方法を取り入れた。学生からは「事前に動画を視聴しておくことで具体的な手順がイメージできた」という意見が多数みられた。
25. 兵庫県看護協会専任教員養成講習会「看護研究」でのインタビューの実施	2016年6月～現在	兵庫県看護協会専任教員養成講習会での「看護研究」の授業において、質的研究のデザインの講義では、半構成面接を理解してもらうために、実際にグループ間でインタビューを行い、観察者はインタビューの良かった点と改善点についてコメントをした。
26. 兵庫県看護協会専任教員養成講習会「看護研究」でのクリティックの実施	2016年6月～現在	兵庫県看護協会専任教員養成講習会での「看護研究」の授業において、量的研究のデザインの講義では、受講者は先行研究の論文を用いてグループワークをしながらチェックリストに沿ってクリティックをし、全体で発表をした。
27. ミニッツペーパーを用いた双方向の授業	2016年4月1日～現在	武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅰ」（専門科目、2年次配当、必修2単位）、「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）において実施した。毎回の講義の最後に、学生はミニッツペーパーを書き提出した。ミニッツペーパーには、今日の講義で学んだこ

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
28. 自己学習票を持込み可とした小テストの実施	2016年4月～現在	と、感想、質問を書いてもらった。提出されたミニツツペーパーの内容を読むことで、学生は講義のどのような内容に興味をもったのか、また難しいと感じたポイントはどこなのかがよく理解できた。また、質問が書かれた際には次回の講義で回答した。このようにすることで、教員からの一方的な授業ではなく、学生からの反応にフィードバックできる双方向の授業ができています。
29. ビデオ撮影によるリフレクションの活用	2012年9月～2015年3月	武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅰ」（専門科目、2年次配当、必修2単位）、「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）において実施した。講義の最後に毎回小テストを実施した。問題は前回の講義内容より、看護師国家試験の過去問を2、3問出題した。小テストは、前回の講義後に配布された自己学習票（A5サイズで左半分のみ書き込み可）の持ち込みを可とした。自己学習票の持ち込みをするには講義が終わってから書き込まなくてはならないため、学生に復習の習慣をつけることができた。小テスト後に、教員が問題の解説を行い、学生が自己採点をした。「講義で聴く」「講義後にテキストを見直す」「自己学習票にまとめる」「小テスト中にまとめた内容を読む」「小テストの解説を聴く」「定期試験前に復習する」と最低6回は反復して学習ができた。これまでに前回の講義を欠席した学生を除いて、自己学習票を白紙の状態でも提出した学生はおらず、講義内容の復習につながっている。
30. 統合看護実習における学生自身の実習目標の設定とプレゼンテーション	2012年10月～2015年3月	兵庫医療大学看護学部実習科目「小児看護学実習」（専門科目、3、4年次配当、必修2単位）において実践した。実習前の技術演習では小児のバイタルサインを測定する際の学生自身の様子を他者の視点から見られるように、パソコンとビデオカメラを連動させて簡単に録画と視聴ができるシステムを作成して活用している。学生からは「自身がどのような表情で子どもと接しているのかわかった」「声かけができてきているのかについて省みることができた」という意見があり、効果がみられた。
31. 文献検索の指導用に複数のキーボードとマウスを接続したパソコンの活用	2011年5月～現在	兵庫医療大学看護学部実習科目「統合看護学実習」（専門科目、4年次配当、必修3単位）において実践した。教員があらかじめ作成した実習目標を達成するために実習するのではなく、学生はこれまでに経験した実習をもとに自身の実習目標を考え、関連する文献での自己学習を行った。病院実習の前に、学生は自身の実習目標についてスライドを作成し、実習グループ内でプレゼンテーションを行った。また、実習後にどこまで達成できたかを実習で学んだこととともにプレゼンテーションを行った。
32. 講義資料のダウンロードができるウェブサイトの活用	2011年4月～2015年3月	兵庫医療大学大学院看護学研究科（修士課程）演習科目「小児看護学演習」（専門科目、1年次配当、必修2単位）において実践した。医学中央雑誌、Medline、CINAHLを用いて、小児看護に関連する文献検索の方法を指導する際に、1台のパソコンに受講者数分のキーボードとマウスを接続した機材を使用することで、教員と院生が同じ画面を見ながら、院生も適宜パソコンを操作して文献検索の方法を習得できるように工夫をしている。
33. 実習期間中のリフレクションの実施	2010年4月～2015年3月	兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護学援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。家族支援看護学のウェブサイトを作成し、サイト内に本学の学生のみがアクセスできるページを作成した。学生の学習効果を高めるために、講義の復習の際に活用しやすいインターネット経由で講義資料および参考資料、動画をダウンロードして閲覧できるようにしている。
34. ルーブリック評価表を用いた実習の評価	2010年10月～現在	兵庫医療大学看護学部実習科目「小児看護学実習」（専門科目、3年次4年次配当、必修2単位）において、学生の実習内容の評価を行うための指標として、ルーブリック評価表を作成した。これを用いることで、教員間での公平な評価が可能となり、指導のポイントの明確化もできた。教員間での点数の検討をする時間の短縮ができ、効果がみられた。また、Microsoft EXCELを用いてクリックするだけで採点ができるプログラムを導入し、採点の自動化を図った。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
35. 講義の配布資料の工夫	2009年4月～現在	兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護学概論」（専門科目、2年次配当、必修2単位）、「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）、武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅰ」（専門科目、2年次配当、必修2単位）、「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）において実施した。学生への配布資料はパワーポイントのスライドを元に作成し、重要な用語については穴抜きとした。学生は講義を聞きながら穴抜きの箇所を記入しなければならないため、集中力を途切れさせずに講義を聞くことができる。学生は記入する箇所が多く過ぎると、記入することばかりに集中してしまうため、各スライドに1、2箇所のみ穴抜きとした。学生からは「眠くならず集中できた」というコメントが多くみられた。
36. PBL形式を用いたグループワークによる看護過程の展開	2009年4月～2015年3月	兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。健康障害を有する小児の事例について紹介し、学生に看護過程を展開させている。学生を5、6名のグループに分けてPBL形式のグループワークを行わせることで、問題の明確化と援助計画立案について主体的に取り組むことができている。また、他のグループの学生の前で、実施した看護過程について発表をさせており、プレゼンテーション能力の向上にもつながっている。
37. 離乳食の試食	2009年4月～現在	兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）で実施した。離乳食、調乳の演習では、発達段階ごとの離乳食の特徴やその違いについて理解を深めるために、学生が実際に離乳食を試食している。演習後のレポートでは、講義だけでは理解し得ない味や食感を体験できたことで、離乳食についての関心や理解が深まったという記述が多く見られた。
38. 視聴覚教材を用いた教育実践	2009年4月～現在	兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護学概論」（専門科目、2年次配当、必修2単位）、「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）、武庫川女子大学看護学部講義科目「小児看護学Ⅰ」（専門科目、2年次配当、必修2単位）、「小児看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）において実施した。講義では小児の健康障害とその看護について理解することを目的としている。そこで、小児の疾患の症状やそれに対する看護援助の方法について、写真や動画を用いて学生が視覚から理解しやすいように工夫をして講義を行った。その結果、「講義は写真や動画を見る機会が多く、視覚的に理解がしやすかった」という意見が多数みられた。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 小児の転倒・転落防止ビデオ	2012年5月	兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。事故防止の講義では、学生が小児の転倒・転落について理解を深め、防止行動がとれるように転倒・転落防止ビデオを作成し、講義で使用している。ビデオは1. 転倒・転落事故の概要について、2. 転落の防止について、3. 転倒の防止について、から構成されている。小児看護学実習では、これまでに学生の受け持ち中の転倒・転落事故は発生していないため、ビデオは学生の理解を高めることに有効であると考えられる。
2. 家族支援看護学学内演習要項	2009年4月	兵庫医療大学看護学部演習科目「小児看護援助論」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。学内演習では「小児の身体計測」「小児のバイタルサインの測定」「小児の点滴の固定方法」について行っている。効果的に演習ができるように自己チェック型の演習要項を作成し、ペアの学生同士で適切に実施できているかのチェックを行わせている。学生は事前学習を行ってから演習に臨むことができおり、演習では主体的に取り組むことができている。
3. 小児看護学実習要項	2009年10月	兵庫医療大学看護学部実習科目「小児看護学実習」（専門科目、3、4年次配当、必修2単位）において実践した。学生の実習が円滑に進むために、実習目的、実習目標、実習のスケジュール、実習の展開方法、提出物、記録の様式、から構成される実習要項を作成した。実習要項をもとに実習前にオリエンテーションを行うことで、学生は実習の具体的な展開が理解でき、不安なく実習を進めることができた。また、記録についてももれなく提出することができた。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 岩手県看護協会 看護教員スキルアップ研修	2019年7月23日	看護専門学校教員を対象に、ジグソー法を取り入れたアクティブラーニングと学生が集中できる講義・演習の工夫について講義を行った。
2. セミナー：今どきの学生から主体性を引き出す授業展開の工夫（大阪市）	2019年5月19日	看護大学の教員、看護専門学校の教員を対象に授業展開の工夫に関するセミナーを実施した。講義での集中力を

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
3. セミナー：今どきの学生から主体性を引き出す授業展開の工夫（東京都）	2019年3月9日	持続させるための工夫、スマホを使用した演習、ジグソー法を取り入れたアクティブラーニング、看護過程の展開について講義をした。
4. セミナー：今どきの学生から主体性を引き出す授業展開の工夫（福岡県博多市）	2019年2月3日	看護大学の教員、看護専門学校の教員を対象に授業展開の工夫に関するセミナーを実施した。講義での集中力を持続させるための工夫、スマホを使用した演習、ジグソー法を取り入れたアクティブラーニング、看護過程の展開について講義をした。
5. 第31回日本看護研究学会近畿北陸地方会の示説での座長	2018年3月	学会での4件の示説発表の座長を務めた。
6. 第47回日本看護学会：慢性看護の口演の座長	2017年9月	学会での4件の口演発表の座長を務めた。
7. 大学院修士課程における副査の担当	2015年4月～現在	武庫川女子大学大学院修士課程において、大学院生2名の研究論文の副査を担当している。
<b>4 その他</b>		
1. 武庫川女子大学研究倫理委員	2020年4月～現在	武庫川女子大学において研究倫理委員を務めた。
2. 武庫川女子大学看護学ジャーナル編集委員長	2020年4月～現在	武庫川女子大学において、武庫川女子大学看護学ジャーナルの編集委員長を務めた。
3. 武庫川女子大学教務委員、看護学科教務委員長	2018年4月1日2020年3月30日	武庫川女子大学において教務委員、および看護学科での教務委員長を務めた。
4. 看護学科カリキュラム検討担当	2018年4月～現在	武庫川女子大学看護学科でのカリキュラム検討担当を務める。
5. 武庫川女子大学附属中学校・高等学校スーパーサイエンス 科学演習実験Ⅱ	2017年4月から現在	附属中学校・高等学校スーパーサイエンスの高校2年生の生徒を対象に科学演習実験Ⅱの授業として「子どもの循環・呼吸の不思議」の講義と演習を行っている。
6. 「より良い授業方法の工夫と実践」に取り組む教員への奨励制度の受賞	2016年8月	平成28年度前期の担当科目「小児看護学Ⅰ」において「より良い授業方法の工夫と実践」に取り組む教員への奨励制度において学長より表彰された。講義では自己学習票の持込を可とした看護師国家試験の過去問の小テストを毎回実施しており、復習の習慣づけや国家試験対策に貢献している。
7. 武庫川女子大学 看護学部臨地実習委員	2016年4月～2018年3月	武庫川女子大学看護学科での臨地実習委員を務めた。
8. 武庫川女子大学「朝小サマースクール」	2015年8月～現在	小学生を対象とした講習会を開講し、手洗いの必要性の教育と手洗い方法の指導、心臓の働きに関する授業を行った。
9. 武庫川女子大学 広報入試委員	2015年4月～2017年3月	大学の広報活動および入試業務に関する委員を務めている。
10. 兵庫医療大学 情報センター運営委員	2014年4月～2015年3月	大学内の情報管理およびコンピューターの管理に関する委員を務めた。
11. 大阪大学平成25年度保健学専攻優秀論文賞（大学院生の部）	2014年2月	博士課程で研究し、Japan Journal of Nursing Scienceへ投稿した論文「Pediatric falls: effect of prevention measures and characteristics of pediatric wards」が優秀論文賞を受賞した。
12. 兵庫医療大学 実習部会	2012年4月～2015年3月	看護学部の病院間での実習の調整を行う実習部会のメンバーを小児看護学分野代表として務めた。
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 3学会合同呼吸療法認定士資格取得（登録番号：第031052号）	2002年12月	
2. 看護師免許取得（登録番号：第20879号）	1999年3月	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 武庫川女子大学看護学部FD 「ICT活用と著作権の基礎知識」	2018年8月21日	武庫川女子大学看護学部FDにおいて看護学部の教員を対象に「ICT活用と著作権の基礎知識」についての講義を行った。
2. 大阪労災病院の看護師への研究指導	2017年11月～現在に至る	大阪労災病院の看護師が実施している看護研究の定期的な指導と研究発表会の講評を行っている。
3. 兵庫県看護協会専任教員養成講習会「看護研究」の講義	2016年7月から現在	兵庫県看護協会専任教員養成講習会での「看護研究」の授業において、「1.看護学における研究の意義、リサーチクエスチョン」「2.研究における倫理」「3.研究の方法：量的研究」「4.研究の方法：質的研究」「5.研究計画書の書き方」「6.質問紙の作り方」の講義を担当した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
4. 高校生への看護学の模擬授業	2015年11月～現在	仁川学院高校、上宮高校、池田高校、須磨友が丘高校、梅花高校、宝塚高校の生徒へ、大学の看護学部ではどのようなことを学ぶのか、看護学部にはどのような特徴があるのか、看護師の仕事、バイタルサインの意味、バイタルサインの測定方法について模擬授業を行った。
5. 病院に勤務する看護師との共同研究の指導	2014年5月～現在	兵庫医科大学病院の小児病棟に勤務する看護師らとともに共同研究を行った。看護師が現場で問題と感じていることからリサーチクエスションを明らかにし、実行可能な調査方法の選択、分析方法、まとめ方の指導を行った。それらの成果については第25回日本小児看護学会学術集会にて「小児病棟に勤務する看護師が摂食障害の患児に陰性感情を抱いた経験とその対処行動」として学会発表を行った。
6. チャイルドケアミーティング	2013年2月～現在	兵庫医科大学病院を主とした阪神間の病院の看護職と兵庫医療大学および武庫川女子大学の教員で、健康障害を有する小児の事例検討および看護職への講義を行っている。
7. 兵庫医療大学 平成23年度「まちの寺子屋師範塾」	2013年12月	子どもの発達・健康・食生活などの子育て支援に関する講座の一環として、家庭で発生しやすい事故とその防止方法について講義を行った。
8. 兵庫医療大学 公開講座「孫育て教室」	2010年10月	祖父母を対象とした公開講座「孫育て教室」にて、家庭での事故防止について講義を行った。
9. 関西子どものケア研究会	2009年3月～2013年2月	関西圏の小児病棟に勤務する看護師と関西圏の大学教員が共同で、健康障害を有する子どもの事例検討を通して、アセスメントの方法や望ましい対応方法についての理解を深めるための検討会を行った。
10. 兵庫県立こども病院 記録委員	2004年4月～2006年3月	兵庫県立こども病院において、集中治療室代表として院内の看護記録に関する委員を担当した。
11. 阪神淡路大震災後の復興住宅で生活する高齢者への健康チェック、健康相談のボランティア活動	1999年8月～2002年3月	阪神・淡路大震災後のHAT神戸の復興住宅で生活する高齢の住民を対象に、神戸市立看護短大の教員らとともに月に1回セルフケア支援を目的に健康チェックや健康相談、季節のイベントなどのボランティア活動を行った。
12. 看護学生への臨床実習の指導	1999年4月～2006年3月	兵庫県立こども病院にて看護師として在職していた際には、兵庫県立大学看護学部、兵庫県立総合衛生学院看護学科の学生の小児看護学実習を受け入れ、臨床実習の指導を行った。
13. 阪神淡路大震災後の仮設住宅で生活する高齢者への健康チェック、健康相談のボランティア活動	1996年4月～1999年3月	阪神・淡路大震災後の神戸市ポートアイランド第1、第2仮設住宅で生活する高齢の住民を対象に、神戸市立看護短大の教員らとともに月に1回セルフケア支援を目的に健康チェックや健康相談のボランティアを行った。
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. エビデンスにもとづいた入院している子どもの転倒・転落防止ガイドブック	単	2018年3月	武庫川女子大学出版部	小児科に入院した子どもの転倒・転落事故を防止するために本著をまとめた。内容は、子どもの転倒と転落の特徴、子どもの転倒の危険因子と転落の危険因子とは、転倒と転落について親や看護師はどのように認識しているか、転倒・転落リスクアセスメントツールとは、転倒の防止対策と転落の防止対策、子ども用の転倒・転落防止プログラムとその使用方法、である。
<b>2 学位論文</b>				
1. 入院している小児の転倒・転落防止プログラムの構築	単	2013年3月	大阪大学大学院 医学系研究科博士後期課程 保健学専攻 博士学位論文	入院している小児の転倒・転落を防止するためのプログラムを構築する研究を行った。小児用アセスメントツール作成についての示唆を得るため、小児看護経験が5年以上の看護師52名を対象に3段階のデルファイ法による調査を行い、小児の転倒の危険因子34項目と転落の危険因子34項目を明らかにした。また、小児が入院する病棟252施設を対象に横断調査を行い、転倒・転落率を低下させる対策や入院環境を明らかにした。これらの結果より、転倒・転落防止プログラムを構築した。
2. 小児看護を实践する看護師の属性および個人特性と職務ストレスおよび離職願望との関連－病棟形態による分析と比較－	単	2008年3月	大阪大学大学院 医学系研究科博士前期課程 保健学専攻、修士学位論文	小児看護を实践する看護師の属性や個人特性が、職務ストレスおよび離職願望にどのような影響を与えているかを明らかにするため、27施設の看護師445名を対象に自記式質問紙調査を実施した。240名（小児病棟110名、混合病棟130名）から回答があり、小児病棟と混合病棟のそれぞれにおいて離職願望に影響を与える要因、職務ストレス認知に影響を与える要因について明らかにすることができた。
<b>3 学術論文</b>				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
1. 学会発表 初心者から指導者まで！現場で働く看護師さんに向けた看護研究の進め方(第5回) 研究発表の方法	単	2020年8月	看護人材育成, 17(3), 91-97	病院で勤務する看護師を対象とした研究方法についての解説をまとめた。 第5回は、研究発表の方法についてまとめた。
2. 学会発表 初心者から指導者まで！現場で働く看護師さんに向けた看護研究の進め方(第4回) 倫理審査をクリアするための研究計画書の書き方	単	2020年6月	看護人材育成, 17(2), 58-64	病院で勤務する看護師を対象とした研究方法についての解説をまとめた。 第4回は、倫理審査申請書、研究計画の書き方についてまとめた。
3. 看護師が捉える小児患者の退院困難な社会的要因(査読付き)	共	2020年5月	小児保健研究, 79(3), 259-266	小児患者が退院困難となる社会的要因を明らかにすることを目的として、看護師18人を対象に半構成的面接を実施した。その結果、【学校のサポートの体制が整っていない】【小児患者を受け入れてもらえない】【小児の在宅ケアに関連した制度の活用困難】の3カテゴリに類型化された。 本人担当部分：方法、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可 共著者名：前田由紀、藤田優一、藤原千恵子
4. 小児科外来の看護師が実施しているスムーズに診療や看護を進めるための判断や工夫 参加観察とインタビューによる調査(査読付き)	共	2020年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 5, 25-32	小児科外来の診療場面において、スムーズに診療や看護を進めるための看護師の判断や工夫について明らかにするために、小児科外来に勤務する看護師の5名を対象に参加観察とインタビューを実施した。その結果、『時間を短縮するための判断・工夫』『安全に診療をするための判断・工夫』『関係性を築くための判断・工夫』『待ち時間に対する不満を軽減させるための判断・工夫』から構成されていた。 本人担当部分： 担当ページ：共著者名：藤田優一、吉田陽子、北尾美香、植木慎悟、藤原千恵子、竹島泰弘
5. 重症心身障がい児の短期入所における養育者の安心に繋がる看護支援(査読付き)	共	2020年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 5, 15-24	重症児の短期入所における養育者の安心に繋がる看護支援について明らかにすることを目的として、重症心身障がい児の養育者12名を対象に、質的記述的研究を行った。その結果、重症児の養育者の安心に繋がる看護支援は、【愛護的なケア】、【養育者の期待に応じたケア】、【養育者への配慮】、【情報と物品の管理】から構成されていた。 本人担当部分：分析、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：徳島佐由美、藤田優一、藤原千恵子、植木慎悟、中山昌美、田家由美子、松本久
6. 臨地実習指導者としての経験がない看護師の小児看護学実習に対する認識とその関連要因(査読付き)	共	2019年9月	日本小児看護学会誌, 28, 19-26.	小児看護学実習を受け入れている病棟に勤務する臨地実習指導者としての経験がない看護師の、小児看護学実習に対する認識と、その認識に関連する要因を分析することを目的に質問紙調査を行った。対象者は、小児看護学実習に対して『子どもや家族のケア効果』を最も強く、次いで『学生指導に対する困難感』を強く認識していた。重回帰分析の結果、対象者は、「業務量」や「子どもが嫌がる処置への対応」といった看護師側に向けたストレスを感じる者ほど、看護師主体に『いつもどおりにできない負担感』を感じていた。一方で、「子どもと家族への対応」や「難しい対象へのかかわり」といった子どもと家族に向けたストレスを感じるほど、子どもと家族中心に『子どもや家族へのケア効果』や『学生がもたらす摩擦』を感じていた。 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：新家一輝、植木慎悟、北尾美香、藤田優一、前田由紀、藤原千恵子
7. レスパイト入院における重症心身障がい児の家族から信頼を得るための経験豊富な看護師のかかわり(査読付き)	共	2019年9月	日本小児看護学会誌, 28, 35-41.	経験豊富な看護師11名を対象に、重症心身障がい児(以下、重症児)のレスパイト入院時に重症児の家族から信頼を得るために実践している看護師のかかわりについて明らかにすることを目的に質的記述的研究を行った。その結果、経験豊富な看護師のレスパイト目的の入院における重症児の家族へのかかわりは、【少ない機会をとらえた意図的な介入】、【レスパイト入院中の重症児の生活状況を詳細に伝達】、【家族の望みに沿った連絡】、【在宅でのケア方法の尊重】、【在宅での生活リズムの保持】、【在宅の環境の取り込み】が抽出された。 本人担当部分：論文内容の妥当性 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 徳島佐由美、藤田優一、藤原千恵子
8. 現場で働く看護師さんに向けた看護研究の進め方 研究テーマってどうやってみつけるの？勤務をす	単	2019年8月	看護人材育成, 16(3), 23-31	病院で勤務する看護師を対象とした研究方法についての解説をまとめた。 第1回は、リサーチクエスションの導き方についてま



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
<p>る中での疑問を“リサーチクエスト”にして目的、意義を明確化しよう！</p> <p>9. Parental factors predicting unnecessary ambulance use for their child with acute illness: A cross-sectional study</p>	共	2019年8月	Journal of Advanced Nursing (採択済み)	とめた。
<p>10. 胆道閉鎖症を疑われた子ども（新生児）の母親が退院するまでの期間に不安に陥った体験のナラティブ分析（査読付き）</p>	共	2019年7月	日本小児看護学会, 28, 235-239	子どもが軽症であるにもかかわらず救急車を要請した親の特徴について明らかにするため、171人の親を対象に調査を行った。急性疾患のある子どもの親の不確かさ尺度のカットオフポイントは59であった。ロジスティック回帰分析の結果では、「子どもの病気の情報源を利用しなかった」「ヘルスリテラシーが低い」「初めて見た症状であった」「不確かさが高い」ことが救急車を要請と有意に関連していた。 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 植木慎悟, 小間井和代, 大橋一友, 藤田優一, 北尾美香, 藤原千恵子
<p>11. 口唇裂・口蓋裂のある子どもが小学校に入学する際に母親が抱えていた不安（査読付き）</p>	共	2019年5月	小児保健研究, 78 (3), 220-227	本研究では、児が胆道閉鎖症を疑われてから病院を退院するまでの期間において、その疾患を否定されたにもかかわらず母親の不安が継続した体験を明らかにすることを目的とした事例検討を実施した。Emdenのナラティブ分析を行った結果、3つのテーマ（「児の病気の重大性」「ほかの症状の見落とし」「母親が行ってきたことの否定」）が抽出された。 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：植木慎悟, 藤田優一, 北尾美香, 藤原千恵子 植木慎悟, 藤田優一, 北尾美香, 藤原千恵子
<p>12. 重症心身障がい児のレスパイト目的での入院に対する経験豊富な看護師の認識（査読付き）</p>	共	2019年3月	日本看護学会論文集：ヘルスプロモーション, 49, 83-86	口唇裂・口蓋裂のある子どもが小学校に入学する際に母親が抱えていた不安を明らかにするため、口唇裂・口蓋裂のある子どもの母親13人に半構造化面接調査を行い、27コード、10サブカテゴリーが抽出され、【ほかの子どもからの容姿の違いへの指摘】、【容姿の違いに関連したわが子が抱く葛藤】、【発音の不明瞭さ】、【外傷による創の離開】、【教員による差別的な発言】の5カテゴリーに分類された。 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：北尾美香, 藤田優一, 植木慎悟, 藤原千恵子
<p>13. 幼児の採血場面における小児科外来の看護師による声掛け（査読付き）</p>	共	2019年3月	日本看護学会論文集：ヘルスプロモーション, 49, 87-90	重症心身障がい児がレスパイト目的で入院する施設での看護師9名を対象にレスパイト目的での入院に対する認識についてインタビュー調査を行った。それらの認識については、51コード、9サブカテゴリー、2カテゴリーが明らかとなった。 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：徳島佐由美, 藤田優一, 藤原千恵子
<p>14. 小児科外来の看護師が認識する「保護者の小児科外来に対する満足度」の関連要因（査読付き）</p>	共	2019年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 4, 47-54	大学病院の小児科外来にて、幼児の採血場面について5名の看護師の声掛けに着目して参加観察を行った。11名の幼児の採血場面を観察し、43コード、12カテゴリーに分類された。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一, 吉田陽子, 北尾美香, 植木慎悟, 藤原千恵子
<p>15. 原因食物を摂取する食物アレルギーの学童への看護実践において小児アレルギーエデュケーターが困難と感じていること（査読付き）</p>	共	2019年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 4, 63-68	小児科外来の看護師が認識する「保護者の小児科外来に対する満足度」に対する関連要因について明らかにするため、総合病院451施設を対象に調査票を用いた横断研究を実施した。満足度の影響要因としては、医師と看護師の人間関係、待ち時間、医師の子どもや保護者への対応、小児科経験の浅い看護師の教育、複数の検査がある場合は結果がでるまでの時間が長い検査から実施することの5項目が有意な関連要因であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名藤田優一, 北尾美香, 植木慎悟, 藤原千恵子
<p>原因食物を摂取する食物アレルギー（以下FA）の学童への看護実践において小児アレルギーエデュケーター（以下PAE）が困難と感じていることを明らかにすることを目的に、PAE11名を対象に半構造化面接を行い、質的記述的に分析した。PAEは、＜症状を見極め、原因食物摂取を促す難しさ＞＜不安を感じるFA学童へ原因食物摂取を促す難しさ＞＜FA学童</p>				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
16. ジグソー法を取り入れたアクティブラーニングに対する学生からの評価：小児看護学演習科目における看護過程展開の実践報告（査読付き）	共	2019年2月	日本看護科学会誌, 38, 2 37-244	<p>の意思を確認する難しさ&gt;&lt; FA 学童の思いを代弁する難しさ&gt;&lt;結果が不確実な免疫療法を受けるFA学童を支援する難しさ&gt;を感じていた。                      本人担当部分：結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：西田紀子、藤田優二、藤原千恵子</p> <p>2年次後期の小児看護学演習科目における看護過程の展開でジグソー法を取り入れたアクティブラーニングを実施した。その実施後の学生からの評価について示した。65名より有効回答があり、「積極的に参加できた」「責任を持って参加できた」という学生が9割以上を占め、ジグソー法の満足度は平均80.5点であった。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優二、北尾美香、植木慎悟、藤原千恵子</p>
17. 学会発表 初心者から指導者まで！現場で働く看護師さんに向けた看護研究の進め方(第3回) 質的研究って何?インタビュー調査とその方法	単	2019年12月	看護人材育成, 16(5), 10-116	<p>病院で勤務する看護師を対象とした研究方法についての解説をまとめた。                      第3回は、インタビュー調査の方法についてまとめた。</p>
18. 学会発表 初心者から指導者まで！現場で働く看護師さんに向けた看護研究の進め方(第2回) 量的研究って何?アンケート調査とその方法	単	2019年10月	看護人材育成, 16(4), 112-118	<p>病院で勤務する看護師を対象とした研究方法についての解説をまとめた。                      第2回は、アンケート調査の方法についてまとめた。</p>
19. Resilience and difficulties of parents of children with a cleft lip and palate (査読付き)	共	2018年8月	Japan Journal of Nursing Science, 15(4)	<p>口唇口蓋裂を持つ小児の両親64ペアに対し、レジリエンスおよび困難感についてのアンケート調査を行った。母親は父親よりも小児の将来を心配する気持ちと自らを責める傾向にあった。一方で、レジリエンスの中の問題解決力と受け止め力の点において母親よりも父親のほうが高かった。                      本人担当部分：データ収集と分析、論文執筆                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：植木慎悟、藤田優二、北尾美香、熊谷由加里、池美保、新家一輝、松中枝理子、藤原千恵子</p>
20. スマートフォンを活用した“気づき”を促す技術演習	単	2018年8月	看護人材育成, 15(3), 89-94	<p>現代の若者にとって、スマートフォンはなくてはならないツールである。活用の一例として、技術演習で学生が実施する姿をペアの学生がスマートフォンで動画撮影をし、実施後にスマートフォンで動画を視聴することで、第三者の視点で客観的に手順や動き、姿勢などを確認することができる。また、技術演習の手技的なチェックだけではなく、実施をしている時の表情や声かけといった態度面の様子を第三者の視点から客観的に見ることが出来る。また、演習用の動画を撮影すれば、学生はYouTubeで視聴して事前学習をすることも出来る。</p>
21. 小児アレルギーエデュケーターの認識による食物アレルギー学童の原因食品摂取への影響要因（査読付き）	共	2018年7月	小児保健研究, 小児保健研究, 77(4), 380-387	<p>食物アレルギー学童の原因食品摂取に影響を与える要因を、小児アレルギーエデュケーターがどのように認識しているかを明らかにすることを目的とし、PAEを対象に半構造化面接を行った。その結果、PAEは、「FA原因食品摂取を困難にする要因」として、【原因食品によるアレルギー症状誘発の経験】、【除去食の習慣】があり、「FA原因食品摂取を促す要因」として、FA学童自身の【内なる原動力】、【支えになる人の存在】があると認識していた。                      本人担当部分：分析                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      著者：西田紀子、藤田優二、藤原千恵子</p>
22. 看護師を対象とするデルファイ法を用いた国内文献の研究手順の実態（査読付き）	共	2018年3月20日	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 3, 35-42	<p>看護師を対象とするデルファイ法を用いた国内文献の研究手順の実態について明らかにすることを目的とした。2017年6月に医学中央雑誌web版にて、キーワードを「デルファイ」として検索した結果、看護師を対象とするデルファイ法を用いた研究論文は29件が該当した。これらの文献を分析した結果、専門家集団の経験則から得られる価値観や評価、予測の指標について意見を集約して合意形成をすることを目的とした研究が多くみられた。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      藤田優二、植木慎悟、北尾美香、前田由紀、藤原千</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
23. 小学校低学年の口唇裂・口蓋裂児の疾患に関連した否定的な体験に関する母親の認識（査読付き）	共	2018年3月20日	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 3, 15-24	<p>恵子</p> <p>小学校低学年の口唇裂・口蓋裂児の母親が認識している児の学校での疾患に関連した否定的な体験とそれに対する母親の思いを明らかにすることを目的に、小学校低学年の口唇裂・口蓋裂児の母親13名に半構造化面接調査を行い、内容分析法にて分析した。母親は口唇裂・口蓋裂児の否定的な体験として【容姿や行動の違いへの指摘に自分で対応できた】【容姿の違いへの指摘や病気の暴露に苦痛を感じていた】と認識していた。その体験に対して母親は【疾患に関連したからかいは起こるものだ】【疾患に関連したからかひによる子どもの苦痛をわかってあげたい】【子どもが自分でからかひに対応できるようになって欲しい】【子どもに自分の疾患を前向きに捉えて欲しい】【教師はからかひに適切に対応して欲しい】と思っていることが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：北尾美香、熊谷由加里、高野幸子、池美保、古郷幹彦、植木慎悟、藤田優一、藤原千恵子</p>
24. 小児科外来の看護師が受付から診察が終わるまでの間に実施している診療や看護をスムーズにさせるための技術・工夫（査読付き）	共	2018年11月30日	外来小児科, 21 (3), 456-459.	<p>総合病院の小児科外来の看護師が、受付から診察が終わるまでの間に実施している診療や看護をスムーズにさせるための技術・工夫、及び看護師が認識する各月の忙しさの程度について明らかにするため調査を行った。62名より回答があり、スムーズにさせるための工夫は44コードが明らかとなった。</p> <p>担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、北尾美香、植木慎悟、藤原千恵子</p>
25. 母親から口唇裂・口蓋裂のある子どもへ疾患の説明をした際の契機とその理由（査読付き）	共	2018年10月	日本口蓋裂学会雑誌, 43 (3), 216-222.	<p>本研究の目的は、母親が口唇裂・口蓋裂のある子どもへ疾患の説明をした際の契機とその理由を明らかにすることである。口唇裂・口蓋裂の専門的治療を行うA病院に入院中の小学校低学年の口唇裂・口蓋裂のある子どもをもち、既に子どもへの疾患の説明をしている母親13名を対象に、母親が子どもに疾患の説明をしようと思った契機とその理由について半構造化面接を行った。疾患の説明の契機は、【小学校入学を契機に】【手術を契機に】【子どもの疑問を契機に】【日々の生活の中で】の4カテゴリーに分類された</p> <p>本人担当部分：結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：北尾美香、熊谷由加里、高野幸子、池美保、植木慎悟、藤田優一、古郷幹彦、藤原千恵子</p>
26. 口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの母親が医療者に期待する支援と実際に受けた支援（査読付き）	共	2017年7月	日本看護学会論文集：ヘルスプロモーション, 47, 103-106	<p>口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの母親の医療者への期待と実際に受けた支援の内容を明らかにし、今後さらに充実すべき支援への示唆を得るために、母親235名を対象に質問紙調査を実施した。医療者への期待・実際に受けた支援ともに「治療や手術について、親が理解しやすいように説明してくれること」、「手術を受けるまでの哺乳・離乳食などの具体的な助言をしてくれること」、「手術後の注意や食事などの具体的な助言をしてくれること」の項目が上位3つに上がった。また、医療者への期待と実際に受けた支援の差については、ほとんどの項目で期待通りとした割合が一番多かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：北尾美香、松中枝理子、池美保、熊谷由加里、植木慎悟、新家一輝、藤田優一、石井京子、藤原千恵子</p>
27. 総合病院の小児科外来の看護師が処置・検査中に実施している診療や看護をスムーズにさせるための技術・工夫（査読付き）	共	2017年7月	日本看護学会論文集：ヘルスプロモーション, 47, 107-110	<p>小児科外来の看護師が、処置・検査中に実施している診療や看護をスムーズにさせるための技術・工夫について明らかにするために小児科外来に勤務する看護師を対象に調査を行った。63名より回答があり、記録単位は計105件、コード数は45件であった。カテゴリーとして「デストラクションの実施」「プレゼンテーションの実施」「処置検査時は保護者同伴で実施」などが明らかとなった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、北尾美香、植木慎悟、藤原千恵子</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
28. 小児用転倒・転落リスクアセスメントツール C-FRAT第3版の評価者間信頼性の検証（査読付き）		2017年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 2, 45-51	<p>恵子</p> <p>小児用転倒・転落リスクアセスメントツールC-FRAT (Child Falls Risk Assessment Tool)第3版の評価者間信頼性を明らかにするため13名の看護師の一致度を調査した。各アセスメント項目のカップ係数は0.414~1.000であり、リスク判定結果のカップ係数は0.852であった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p> <p>共著者名：藤田優二、植木慎悟、北尾美香、藤原千恵子</p>
29. 口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの父親が医療者に期待する支援と実際に受けた支援	共	2017年10月	日本口蓋裂学会雑誌, 42(3), 187-193	<p>口唇口蓋裂児をもつ父親を対象に医療者への期待と実際に受けた支援の内容を明らかにするためアンケート調査を行い、105名から回答があった。父親が期待する支援として最も多かった項目は「治療や手術について、親が理解しやすいように説明してくれる」、「手術後の注意や食事などの具体的な助言をしてくれる」、「手術を受けるまでの哺乳・離乳などの具体的な助言をしてくれる」であり、実際に受けた支援も同様であった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、結果、考察</p> <p>担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p> <p>松中枝理子、北尾美香、古郷幹彦、池美保、熊谷由加里、植木慎悟、新家一輝、藤田優二、藤原千恵子</p>
30. 看護師が認識する「入院中の小児の転倒・転落について困っていること」（査読付き）	単	2016年4月	第46回日本看護学会論文集：看護管理, 46, 353-356	<p>看護師が認識する「入院中の小児の転倒・転落について困っていること」について明らかにするため、28施設の看護師221名を対象に調査を行った。61名より回答があり、「入院中の小児の転倒・転落について困っていること」の自由回答を分析した結果、記録単位は117件であった。それらは40のコード、13のサブカテゴリー、5つのカテゴリー「家族からの協力が困難」「システムの不備」「子どもからの協力が困難」「ハード面の不備」「医療者の意識の低さ」に類型化された。</p>
31. 臨地実習指導者経験による看護師の小児看護学実習に対する認識と職務ストレスおよび看護キャリア認知の差異（査読付き）	共	2016年3月	日本看護学教育学会誌, 25(3), 25-35	<p>小児看護学実習を受け入れている病棟の看護師は、臨地実習指導者の経験の有無により、小児看護学実習に対する認識、職務ストレスおよび看護キャリア認知において差異があるかを明らかにするため、調査を行った。825名より回答があり、指導者の経験がある看護師は小児看護学実習に対する認識の『実習を糧とした看護師自身の成長』などの3因子、職務ストレスの『家族への対応』などの6因子、看護キャリア認知の4因子が有意に高得点であった。</p> <p>本人担当部分：結果、考察</p> <p>担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p> <p>共著者名：藤原千恵子、木村涼子、林みずほ、高島遊子、新家一輝、植木慎悟、北尾美香、藤田優二</p>
32. 小児が転倒・転落した際のインシデントレポートの要否に関する看護師の判断（査読付き）	共	2016年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 1, 21-27	<p>看護師は小児が転倒や転落をした際にインシデントレポートの要否についてどのように判断しているかを明らかにするため調査を行った。看護師145名より回答があり、「外傷により処置をした」「外傷により検査をした」場合に必要という回答が多く、「家族のみの状況」よりも「看護師がそばにいた状況」で必要という回答が多かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p> <p>共著者名：藤田優二、藤原千恵子、植木慎悟</p>
33. 専門医療機関の口唇裂・口蓋裂の子どもをもつ母親に対する看護援助の内容とその問題（査読付き）	共	2016年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 1, 53-61	<p>口唇裂・口蓋裂の治療を行っている専門病院での看護経験の豊富な看護師11名の面接調査を行った。母親に対する看護についての語りから、専門医療機関外での看護援助の内容と看護援助をする上で看護師が感じている問題を抽出し、カテゴリー化した。看護師は、専門医療機関内での援助と出向して行う看護援助を多様に実施しており、実施するうえの看護師間の連携や病院組織のシステムに関する問題を認識していることが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：結果、考察</p> <p>担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p> <p>共著者名：藤原千恵子、池美保、西尾善子、松中枝理子、藤田優二、新家一輝、高島遊子、植木慎悟、北尾美香、石井京子</p>
34. 成人用ベッドを使用する小児用の	単	2015年6月	兵庫医療大学紀要, 3(1)	10病棟に入院した成人用ベッドを使用する小児641名

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
転倒リスクアセスメントツール：C-FRAT第2版および第3版の妥当性の検証（査読付き）			, 25-34	に小児用の転倒リスクアセスメントツール：C-FRAT第2版を使用した。転倒の発生を有意に高めた危険因子は13項目であり、アセスメントツール第2版の感度は0.83、特異度は0.87、AUCは0.91であった。調査結果をもとに改良した第3版では感度1.00、特異度0.49、AUC0.91であった。
35. Paternal postnatal depression in Japan: an investigation of correlated factors including relationship with a partner（査読付き）	共	2015年5月31日	BMC Pregnancy Childbirth 15:128 doi: 10.1186/s12884-015-0552-x.	国内の生後4か月の乳児がいる父親と母親を対象に、産後うつの実態とその影響要因について調査した。807組の両親から回答があり、父親の13.6%、母親の10.3%がうつ状態であり、父親のうつの影響要因としては、夫婦関係の悪さ、不妊治療の経験、精神的な問題による通院歴、経済的不安などが有意に関連していた。 本人担当部分：データ収集と分析、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：西村明子、藤田優一、勝田真由美、石原あや、大橋一友
36. 入院児の転倒・転落防止対策：デルファイ法による検討（査読付き）	共	2015年5月	日本看護科学会誌, 35	小児看護を実践する看護師よりコンセンサスの得られた「小児の転倒・転落を防止するために実施すべき対策」について明らかにするため3段階のデルファイ法の調査を行った。90名より回答があり、小児に対する対策8項目、家族に対する対策16項目、環境に対する対策5項目、病棟全体での取り組み6項目の計35項目の防止対策を明らかにした。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、新家一輝
37. 小児看護学実習に対する看護師の認識と影響要因：看護師の認識の因子構造と妥当性（査読付き）	共	2015年3月	大阪大学看護学雑誌, 21(1), 7-13	小児看護学実習を受け入れている病棟の看護師を対象に、実習に対する認識の構造を明らかにするため質問紙調査を行い、833名から回答を得た。実習に対する認識を因子分析した結果、『実習を糧にした看護師自身の成長』『いつも通りにできない負担感』『子どもや家族へのケア効果』『学生の能力や態度に対する困惑感』『学生指導に対する困難感』『学生がもたらす摩擦』の6因子が抽出された。 本人担当部分：結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：木村涼子、藤原千恵子、高島遊子、新家一輝、林みずは、植木慎悟、藤田優一、北尾美香
38. 転倒・転落防止オリエンテーションDVD「入院されるお子様の転倒・転落事故防止に関するお願い」を視聴した家族の意見および転倒・転落防止に関する理解度の変化（査読付き）	単	2014年9月	兵庫医療大学紀要, 2(1), 27-35	小児の家族を対象とした転倒・転落防止オリエンテーションDVDを作成した。入院した小児の家族136名に視聴してもらい81名より質問紙の返送があった。DVDの内容は「分かりやすかった」が60名(74.1%)、「非常に分かりやすかった」が20名(24.7%)であった。DVD視聴後の理解度は、12項目の全てにおいて高くなっていた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、藤原千恵子
39. 産後4か月の乳児をもつ父親の夫婦関係満足度への影響要因（査読付き）	共	2014年4月	第44回日本看護学会論文集：母性看護, 44, 34-37	産後4か月の乳児をもつ父親を対象に、夫婦関係満足度の影響要因について調査を行った。735名より回答があり、父親の夫婦関係満足度の平均値は21.4、中央値は22.0であった。夫婦関係満足度を高める影響要因は「母親の夫婦関係満足」「対児感情：接近」「パートナーとの関係のことで相談できる人がいる」など5要因であった。また、「父親の産後うつ」や「対児感情：回避」などの3要因が夫婦関係満足度を低下させる影響要因であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、西村明子、勝田真由美、石原あや、末原紀美代、大橋一友
40. 小児用転倒・転落防止プログラムに対する看護師の意見—小児と家族用の転倒・転落防止DVDとパンフレットについて—（査読付き）	共	2014年4月	第44回日本看護学会論文集：看護管理, 44, 173-176	入院している小児の転倒・転落防止プログラム第2版の転倒・転落防止DVDとパンフレットについての改善に向けた課題およびその効果を明らかにすることを目的に、プログラムを実施した看護師252名を対象に調査を行った。103名より回答があり、DVD、パンフレットともに分かりやすくと回答した看護師は95%以上であった。また、転倒・転落の防止に効果があるという回答は8割近くにみられ、看護師からの支持は得られた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
41. サークルベッドを使用する小児用の転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT第2版および第3版の妥当性の検証（査読付き）	共	2014年12月	日本看護管理学会誌, 18(2), 125-134	<p>、結果、考察 共同発表者：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、菰野朱美、平山和代、藤原千恵子</p> <p>転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第2版をサークルベッドを使用している幼児697名を調査対象に使用した。アセスメントツール第2版の妥当性を示す感度は0.78、特異度は0.73、AUC(ROC曲線下面積)は0.81であった。調査結果をもとに改良した第3版は感度が0.78、特異度は0.76、AUCは0.83であった。本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、二星淳吾、藤原千恵子</p>
42. 幼児用の転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT第1版の危険因子と転倒・転落との関連およびカットオフポイントの妥当性の検証（査読付き）	共	2014年12月	兵庫医療大学紀要, 2(2), 19-26	<p>サークルベッドを使用している幼児104名を調査対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第1版を使用した。危険因子17項目が転倒・転落と有意に関連していた。アセスメントツールの妥当性を示す感度は0.95、特異度は0.47であり、AUC(ROC曲線下面積)は0.76であった。本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、藤原千恵子</p>
43. 小児用転倒・転落防止プログラム第2版実施による転倒・転落率の変化および、看護師のプログラムに対する意見（査読付き）	共	2014年12月	小児保健研究, 73(6), 88-894	<p>小児病棟10施設で転倒・転落防止プログラム第2版を実施した。入院した小児3,501名のうち1,338名(38.2%)の小児に6ヵ月間実施し、転倒・転落率は2.06から1.53に有意に低下した。看護師103名よりプログラムに対する意見の回答があり、プログラムの実施により小児と家族への転倒・転落防止の説明が統一されたという回答は82名(79.6%)であった。本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、藤原千恵子</p>
44. 催眠剤、鎮静剤、麻酔剤使用後の小児について転倒・転落に注意を要する時間の指標—デルファイ法を用いた看護師の判断基準の調査—（査読付き）	共	2013年7月	日本小児看護学会誌, 22(2), 54-60	<p>看護師が判断する小児の催眠剤、鎮静剤、麻酔剤使用後の転倒・転落に必要な時間の指標を明らかにすることを目的として調査を行った。小児看護経験が5年以上の看護師を対象に2回のデルファイ法を実施した。転倒・転落に必要な時間の指標として、トリクロホスナトリウムシロップは3時間、抱水クロラル坐剤3時間、ミダゾラム6時間、チアミラールナトリウム3時間、全身麻酔手術の帰室後は6時間であることが明らかとなった。本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、藤原千恵子</p>
45. 入院している小児への転倒防止対策と転落防止対策の実施状況（査読付き）	共	2013年4月	第43回日本看護学会論文集：看護管理, 43, 15-18	<p>入院している小児への転倒防止対策と転落防止対策について明らかにするため、看護師14名を対象に半構成面接を行った。次に明らかとなった転倒・転落防止対策をもとにアンケートを作成し横断調査を行った。半構成面接では転倒防止対策が14項目、転落防止対策が24項目が明らかとなった。横断調査では252施設より回答があり、転倒防止対策30項目、転落防止対策36項目とその実施状況が明らかとなった。本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、藤原千恵子</p>
46. 入院している小児のサークルベッドからの転落に関する危険因子—デルファイ法による調査—（査読付き）	共	2013年3月	日本小児看護学会誌, 22(1), 32-39	<p>入院している小児のサークルベッドからの転落の危険因子について明らかにすることを目的として、小児看護経験が5年以上の看護師を対象に3段階のデルファイ法による調査を実施した。第1段階は看護師14名に半構成面接を行った。第2段階は看護師65名、第3段階では52名に対して質問紙調査を行った。明らかとなった転落の危険因子は、年齢・発達6項目、性別1項目、性格・パーソナリティ10項目、疾患・症状・治療4項目、付き添い者の状況9項目、入院環境4項目の計34項目であった。本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
47. 小児用転倒・転落リスクアセスメントツール28件の分析（査読付き）	単	2013年3月	兵庫医療大学紀要, 1(1), 35-45	共著者名：藤田優二、藤原千恵子 全国の病院で使用されている小児用の転倒・転落リスクアセスメントツール28件の危険因子および使用方法について明らかにすることを目的として調査を行った。危険度が3段階のアセスメントツールのカットオフポイントの平均は危険度Ⅱが8.1点（最大得点の20.6%）、危険度Ⅲが17.1点（最大得点の40.6%）であった。28件の危険因子を分類した結果、明らかとなった危険因子は114項目、20カテゴリーであった。
48. Pediatric falls: effect of prevention measures and characteristics of pediatric wards（査読付き）	共	2013年12月	Japan Journal of Nursing Science, 10(2), 223-231	入院している小児の転倒・転落の影響要因を明らかにすることを目的として、小児が入院する病院603施設を対象に調査を行った。252施設より回答があり、転倒・転落率は平均1.36（1000 patient days）であった。転倒・転落率を低下させる影響要因として、平均在院日数が長いこと、転倒・転落ハイリスク患者の情報共有の実施、新人看護師の研修の回数が多いこと、患者家族へのパンフレットを用いたベッド柵の取り扱いについての説明などが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
49. 入院している小児の転倒・転落に関する文献検討	単	2013年12月	兵庫医療大学紀要, 1(2), 3~14	共著者名：藤田優二、藤田真由子、藤原千恵子 入院している小児の転倒・転落に関する文献検討を行い、研究の現状と今後の課題を明らかにするため、国内の文献54件、国外の文献13件の計67件を分析した。転倒・転落防止を説明するためのパンフレットやDVD、アセスメントツールに関する研究が多く報告されていた。しかし、国内の文献では転倒・転落率が統一されておらず、アウトカムが十分に検証されていない現状がみられた。今後の課題としては、小児の転倒・転落に関するインシデントの報告基準の明確化と、転倒率、転落率の統一化であることが明らかとなった。
50. 小児との混合病棟に入院する成人患者の転倒・転落と入院環境との関連（査読付き）	共	2012年3月	第42回日本看護学会論文集：成人看護Ⅰ, 42, 196-199	小児との混合病棟に入院する成人患者の転倒・転落と入院環境との関連について調査を行った。136施設の混合病棟から回答があり、成人患者の転倒・転落率の平均は1.06（1,000患者日）であった。看護師1人あたりの病床数が多い施設では転倒・転落率が高かった。病棟内にプレイルームがある施設では転倒・転落率が低かった。小児患者と成人患者で一定期間担当チームを分けている施設では転倒・転落率が低かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
51. 小児の転倒・転落リスクアセスメントツールの使用状況とその効果（査読付き）	共	2012年2月	日本看護学会論文集：小児看護, 42, 80-83	共著者名：藤田優二、藤原千恵子 小児に対するアセスメントツールの使用状況と転倒・転落率との関連について調査した。252施設から回答があり、小児にアセスメントツールを使用している施設は75.4%であったが、アセスメントツールの種類は小児専用が39.5%、成人と共通が60.5%であった。転落率はアセスメントツールを使用している施設で有意に低かったが、種類別では成人と共通のアセスメントツールを使用している施設の方が転落率は低かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
52. 入院する小児のベッド選択基準の現状および転倒・転落率との関連—総合病院252施設における調査—（査読付き）	共	2012年11月	日本小児看護学会誌, 21(3), 37-43	共著者名：藤田優二、藤原千恵子 小児が入院する際の、サークルベッドと成人用ベッドの選択基準の現状を明らかにし、選択基準と転倒・転落率との関連を検討した。252施設から回答があり、成人用ベッドを使用し始める年齢は「3歳以上4歳未満」（26.4%）と「4歳以上5歳未満」（28.2%）が多かった。成人用ベッドを使用し始める年齢が4歳未満の施設と4歳以上の施設で転倒・転落率を比較すると、4歳以上の施設で転倒・転落率が高かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能
53. 全国の総合病院における小児の入院環境の実態調査（査読付き）	共	2012年11月	小児保健研究, 71(6), 883-889	共著者名：藤田優二、藤原千恵子 小児の入院環境が先行研究と比較してどのように変化しているかを調査した。総合病院603施設を対象に

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
54. 成人との混合病棟における小児看護に関する国内文献の検討（査読付き）	共	2011年7月	小児看護, 34(7), 918-924	<p>横断調査を行い、252施設（回収率41.8%）より回答があった。プレイルームがある施設は小児病棟113施設（97.4%）、混合病棟108施設（79.4%）であった。院内学級の設置は小児病棟59施設（50.9%）、混合病棟38施設（27.9%）、保育士の配置は小児病棟71施設（61.2%）、混合病棟33施設（24.3%）であり、10年前の調査と比較して設置率、配置率は高くなっていた。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優一、石原あや、藤井真理子、藤原千恵子</p>
55. 小児看護を実践する看護師の属性、個人特性、職務ストレスが離職願望に与える影響—小児病棟と成人との混合病棟での分析と比較—（査読付き）	共	2011年6月	日本看護研究学会雑誌, 33(2), 85-94	<p>小児看護を実践する看護師240名を対象として、属性、個人特性、職務ストレスが離職願望に与える影響を明らかにすることを目的として調査を行った。小児病棟では、離職願望に対して家族同室割合は負の関連があり、夜勤回数、職務ストレス認知の「看護師間の人間関係」、コーピング特性の「回避と抑制」は正の関連がみられた。混合病棟では、離職願望に対して小児看護経験年数、ホープ特性は負の関連があり、職務ストレス認知の「業務量」は正の関連がみられた。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優一、藤井真理子、石原あや</p>
56. 成人との混合病棟で小児看護を実践する看護師の職務ストレス—小児患者割合別の比較—（査読付き）	単	2011年4月	第40回日本看護学会論文集：看護管理, 40, 312-314	<p>小児と成人の混合病棟の15施設に勤務する看護師130名を対象に、職務ストレス認知について調査した。小児患者主体の病棟の看護師（72名）と成人患者主体の病棟の看護師（58名）とで比較検討した。「難しい対象への関わり」と「看護師間の人間関係」の職務ストレス認知が小児主体群で有意に高く、「子どもに適した設備・備品」の職務ストレス認知が成人主体群で有意に高かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優一、藤原千恵子</p>
57. 小児看護を実践する看護師の属性と個人特性が職務ストレス認知に与える影響—小児病棟と成人との混合病棟での分析と比較—（査読付き）	共	2010年3月	日本小児看護学会誌, 19(1), 80-87	<p>小児看護を実践する看護師の職務ストレス認知に与える影響について明らかにするため、240名（小児病棟110名、混合病棟130名）を対象に調査を行った。小児病棟では「医師との関係」の職務ストレス認知にホープ特性が影響を与えており、「看護師間の人間関係」などの複数の職務ストレス認知に夜勤回数が影響を与えていた。混合病棟では「子どもとの関わり」「業務量」などの職務ストレス認知にコーピング特性が影響を与えていた。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優一、藤原千恵子</p>
58. 夜勤形態による小児看護を実践する看護師の職務ストレス認知の違い（査読付き）	共	2009年4月	第39回日本看護学会論文集：看護管理, 39, 321-323	<p>小児看護に携わる看護師238名を対象に小児看護師の職務ストレス尺度による調査を行い、病棟形態ごとに夜勤形態別（2交代と3交代）の比較を行った。小児病棟では2交代群で2項目の職務ストレス認知が有意に低く、3交代群で1項目が有意に低かった。混合病棟では2交代群で3項目の職務ストレス認知が有意に低かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p>



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
59. 仮設住宅から復興住宅に移った高齢住民の健康と生活に関する調査5回目の追跡調査より（査読付き）	共	2002年5月	日本災害看護学会誌, 4(1), 46-60	共著者名：藤田優二、藤原千恵子 阪神・淡路大震災後、約6年にわたり第1第2仮設住宅に暮らす高齢住民31名、平均74歳を対象に、復興住宅へ転居後も追跡して「健康と生活」に関する半構成的面接調査を実施した。過去4回の調査結果と比較しながら分析した結果、過去4回の調査と比較し、対象は仮設生活者から、復興住宅で個としての市民生活に適応しようとしていると考えられた。家族同様に主要なサポート提供者として、かかりつけ医・生活指導員がみられ、高齢対象は、配偶者や兄弟等の身近な人の死によりサポートが減少していると考えられた 本人担当部分：データ収集と分析、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 池田清子、山本靖子、中野智津子、能川ケイ、大野かおり、細見明代、松田悟、松田こずえ、藤田優二
60. 復興住宅住民に対する有効なソーシャル・サポート活用の検討（査読付き）	共	2002年3月	神戸市看護大学短期大学部紀要, 21, 145-150	災害復興住宅の居住者203名を対象にソーシャル・サポート活用の実際を明らかにするために調査を行った。57名より回答があり、生活支援相談員、家族、親戚、主治医などの1~2つを活用していた実態が明らかとなった。 本人担当部分：データ収集と分析、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 大野かおり、能川ケイ、中野智津子、山本靖子、池田清子、細見明代、太田深雪、松田悟、中西こずえ、藤田優二
61. 復興住宅における高齢住民の健康と生活 4回目の追加調査より（査読付き）	共	2001年3月	神戸市看護大学短期大学部紀要, 20, 97-102	阪神・淡路大震災から4年にわたり継続して協力が得られた39名の対象について、復興住宅において追跡調査を実施した。その結果、新たに健康上の問題が増加している傾向はみられなかったが、仮設住宅の時期から抱えている慢性病や、復興住宅という物理的・人的環境要因から新たに生活上のストレスが生じていることが示唆された。39名中7名(18%)に抑鬱傾向がみられ、今後も継続して調査を行ないながら、復興住宅における看護支援の課題を明らかにする必要がある 本人担当部分：データ収集と分析、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 池田清子、山本靖子、中野智津子、能川ケイ、大野かおり、細見明代、松田悟、中西こずえ、藤田優二
62. 復興住宅住民の健康と生活を支える援助（査読付き）	共	2001年3月	神戸市看護大学短期大学部紀要, 20, 91-96	阪神・淡路大震災後、災害復興住宅で実施している健康チェックに参加した89名に対して、生活と健康に関するニーズを把握し援助の方向性を検討するために構成的面接調査を行った。その結果、6割以上が高齢者であり、加齢からくる健康障害や自覚症状があったが、住居環境が改善したこともあり主観的にみて健康状態が良いとする者は58%いた。 本人担当部分：データ収集と分析、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 大野かおり、能川ケイ、中野智津子、池田清子、細見明代、山本靖子、太田深雪、松田悟、中西こずえ、藤田優二
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. リスク・ベネフィットのバランスを評価した看護実践への挑戦 小児と高齢者看護のベストプラクティス	共	2014年12月	第34回日本看護科学学会学術集会交流セッション（名古屋市）	臨床実践でリスクの高い小児病棟での転倒・転落予防と高齢者施設における誤嚥性肺炎の予防に焦点をあて、ベネフィットとリスクとのバランスについて考察し、参加者と活発なディスカッションを通して、リスク・ベネフィットに関するエビデンスについて情報交換を行った。 共同発表者：山川みやえ、藤田優二、山田正己、伊藤美樹子、心光世津子、樋上容子、植木慎悟、山田絵里、渡邊浩子、牧本清子
2. 入院している小児の転倒・転落防止に向けた取り組み	共	2012年7月	日本小児看護学会第22回学術集会テーマセッション（盛岡市）	「小児患者用の転倒・転落リスクアセスメントツールの実用化にむけて」 小児のアセスメントツールの使用状況と、作成手順について話題提供を行った。 共同発表者：藤田優二、湯浅真裕美、二星淳吾、藤原千恵子
<b>2. 学会発表</b>				
1. スマートフォンのビデオ機能を用いた自己の振り返りによる絵本の読み聞かせ技術評価	共	2020年9月	日本小児看護学会第30回学術集会（オンライン学術集会）	植木慎悟、北尾美香、藤田優二
2. 小児科の診療所で勤務する看護師の教育の現状とニーズに関する調査	共	2020年9月	日本小児看護学会第30回学術集会（オンライン学術集会）	小児科の診療所で勤務する看護師の教育の現状とニーズについて明らかにすることを目的として調査を

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
査			イン学会集)	実施した。64施設よりアンケートが返送され、子どもの看護について独学で学ぶ際に使用している教材は複数回答で、「小児看護のテキストや雑誌」85.5%、「インターネット」72.7%であった。学びたい程度の平均値が高かった項目は、「アレルギーについて」「予防接種について」などであった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、植木慎悟、北尾美香
3. 唇顎口蓋裂のある小学生の学校生活における疾患に関連した体験	共	2020年6月	日本小児看護学会第30回学術集会（オンライン学術集会） 2020年9月19日～2020年9月30日	唇顎口蓋裂のある小学生の学校生活における疾患に関連した体験を明らかにすることを目的に、小学校4～6年生の唇顎口蓋裂児12名を対象に半構造化面接調査を行った。分析の結果、子どもが学校生活において疾患に関連した体験は【CLPに関連した対応】【他人からの援助】【CLPに関連した対応の拒否】【CLPに関する不快な気分】【CLPに関する不快な気分のなさ】【CLPに関連した友達への思い】【CLPに関する友達からの疑問】【CLPに関連する学校生活の制限】に分類された 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：北尾美香、植木慎悟、藤田優一
4. 口唇裂・口蓋裂の孫をもつ祖母の心理状態 「娘・家族に関連する心理的側面」	共	2020年6月	第44回 日本口蓋裂学会総会・学術集会（日本口蓋裂学会雑誌 抄録号（第45巻2号p. 171）誌面開催）	孫の口唇裂・口蓋裂疾患についての告知直後から口唇形成術後までの祖母の心理状態を明らかにすることを目的に、口唇形成術後（生後約3か月）の孫をもつ父方あるいは母方祖母15人を対象に半構造化面接調査を行った。分析の結果、「娘・家族に関連する心理的側面」は、「娘の苦悩や家族への影響に対する懸念」、「娘の支援への決心」、「普通に対応する娘への安堵感」、「家族の力による安心感」の6カテゴリ0に分類された 本人担当部分：分析の妥当性 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：熊谷由加里、藤田優一、北尾美香、植木慎悟、池美保、古郷幹彦
5. 初年次基礎教育科目におけるGoog leクラスルームを使用した小テストに対する学生からの評価：第1報	共	2020年12月	第40回日本看護科学学会学術集会、2020. 12	藤田優一、清水佐知子、池田七衣、心光世津子、布谷麻耶、田丸朋子、本間裕子、久山かおる
6. アナフィラキシーの既往がある食物アレルギー児の幼児期の心理社会的問題への母親が有効と認識した対応	共	2020年12月	第40回日本看護科学学会学術集会、2020. 12	西田紀子、植木慎悟、藤田優一
7. 初年次基礎教育科目におけるGoog leクラスルームを使用した小テストに対する学生からの評価：第2報	共	2020年12月	第40回日本看護科学学会学術集会、2020. 12	清水佐知子、藤田優一、池田七衣、本間裕子、心光世津子、田丸朋子、久山かおる、布谷麻耶
8. 重症心身障がい児の養育者がレスパイト入院中に看護師に期待する支援と実際に受けた支援	共	2020年12月	第40回日本看護科学学会学術集会、2020. 12	在宅重症児の養育者がレスパイト入院中に看護師に期待する支援と実際に受けた支援および重症児の重症児スコアとの関連性を明らかにするため横断調査を行った。レスパイト入院中の看護支援は養育者の期待に到達しておらず、重症児の医療的ケアが高度なほどより丁寧な看護支援を期待することが明らかとなった。徳島佐由美、藤田優一、植木慎悟
9. 小児患者の退院困難な要因ーデルファイ法による調査一、日本小児看護学会第29回学術集会	共	2019年8月	日本小児看護学会第29回学術集会（札幌市）	前田由紀、藤田優一、藤原千恵子
10. 重症心身障がい児の短期入所（院）における養育者の安心に繋がる要因	共	2019年8月	日本小児看護学会第29回学術集会（札幌市）	徳島佐由美、藤田優一、藤原千恵子、中山昌美
11. 口唇裂・口蓋裂の孫をもつ祖母の心理状態 孫に関連する心理的側面	共	2019年4月	第41回口蓋裂学会総会・学術集会（新潟市）	熊谷由加里、藤田優一、北尾美香、植木慎悟、池美保、古郷幹彦、藤原千恵子
12. 幼児の採血場面における小児科外来の看護師による声かけ	共	2018年9月	第48回日本看護学会：ヘルスプロモーション（岡山）	A病院の小児科外来の看護師5名を対象に、幼児の採血場面の参加観察を実施し、幼児の採血場面における小児科外来の看護師による声かけの内容について明らかにした。参加観察中に看護師が採血をした児は1～6歳の11名であった。看護師の声かけの記録単位は127件あり、コード数は43であった。これらのコードを分類し、12カテゴリ、4つの場面に分けられた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
13. スマートフォンで操作するクリッカーによるアルバイトのプレゼンテーションの評価	共	2018年9月	平成30年度教育改革ICT戦略大会（東京）	<p>担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優二、吉田陽子、北尾美香、植木慎悟、藤原千恵子</p> <p>1年次後期の初年次教育科目「初期演習」90名において、プレゼンテーション能力の向上のため同じ業種のアルバイト同士でグループとなりスライドを作成して発表した。他者評価として、スマートフォンから匿名で回答できる無料のwebアプリのクリッカー“Clica”を使用した。“Clica”での評価は教室内のWi-Fiを使用しトラブルはなく、「簡単にログインできた」という回答がほとんどであった。学生からの感想として、「他の学生から評価されるので頑張ろうと思えた」「プレッシャーで緊張したが発表できた」「採点しないといけないので積極的に聴けた」などがみられた。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p>
14. ジグソー法を用いたグループワークに対する学生からの評価：小児看護学演習科目における看護過程の展開	共	2018年8月	日本看護学教育学会第28回学術集会（横浜）	<p>共著者名：藤田優二、清水佐知子</p> <p>看護学科2年次後期の小児看護学演習科目において、協調学習のひとつであるジグソー法を取り入れたグループワークを実施し、学生からの評価について明らかにした。65名より回答があり、グループワークの満足度の平均は100点満点中80.5点であった。自由回答では「メンバーに欠席者がいると負担が大きくなる」などの意見がみられた。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p>
15. Effectiveness and smoothness of the implementation of paediatric outpatient nursing techniques in Japan.	共	2018年8月	International Conference on Nursing Science & Practice 2018 London, UK	<p>共著者名：藤田優二、北尾美香、植木慎悟、藤原千恵子</p> <p>136施設から回答を得たアンケート調査によって、小児科外来における診察前・診察中・検査中のスムーズな診療につながる看護技術の項目が明らかとなった。子どもや親の安全性につながる技術はそれほど多くの施設では行われていなかったが、それらはコストがかかる理由も考えられる。費用対効果を考慮したほかの技術も考慮される。本人担当部分：データ分析、抄録作成、発表担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p>
16. 小児の転倒・転落防止対策に対する看護師の認識と病棟の転倒・転落防止に対する取り組みの状況との関連	共	2018年7月	日本小児看護学会第28回学術集会（名古屋）	<p>共著者名：藤田優二、北尾美香、藤原千恵子</p> <p>小児が入院する17病棟に勤務する看護師332名を対象として、転倒・転落防止対策に対する実施すべきという認識と病棟の転倒・転落防止に対する取り組みの状況との関連性について明らかにすることを目的として調査を行なった。110名より回答があり、転倒・転落防止対策44項目の認識のうち、病棟の取り組みの状況と有意な相関がみられた対策は17項目であった。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p>
17. 小学校教諭の個人要因による口唇裂・口蓋裂のイメージの差異	共	2018年5月	第65回 日本小児保健協会学術集会（米子）	<p>共著者名：藤田優二、植木慎悟、北尾美香、藤原千恵子</p> <p>小学校教諭の個人要因による口唇裂・口蓋裂のイメージの差異を明らかにすることを目的に、公立小学校教諭6000名を対象に、自記式質問紙調査を行った。肯定的なイメージでは、教諭経験年数は1項目で有意差がみられ、経験年数平均以上群が平均未満群よりも有意に高かった。否定的なイメージでは、教諭経験年数は2項目で、身近なCLP者の存在は10項目で、CLP児の担任経験は5項目で、CLPの知識は11項目で有意な差がみられ、CLPを知る機会が少ない教諭がCLPに否定的なイメージを持ち、CLPを誤解して捉えていたことが明らかとなった。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能</p>
18. 子どものホームケア方法の情報提供を目的としたホームページ開設の試み	共	2018年4月	第33回近畿外来小児科学研究会（大阪）	<p>共著者名：北尾美香、藤田優二、植木慎悟、藤原千恵子</p> <p>小児科外来でよく見られる子どもの症状に対応する親の看護力向上を狙いとして、ホームケア方法を掲載したスマートフォン対応型ホームページ（HP）を開設した背景や今後の展望について報告した。</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
19. 口唇裂・口蓋裂児へ疾患の説明をした際の契機とその理由	共	2018年4月	第42回日本口蓋裂学会総会・学術集会（大阪）	本人担当部分：考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 植木慎悟、藤田優二、北尾美香、藤原千恵子 本研究の目的は、母親が口唇裂・口蓋裂のある子どもへ疾患の説明をした際の契機とその理由を明らかにするため、母親13名を対象に調査を行った。説明の契機は、【小学校入学を契機に】【手術を契機に】【子どもの疑問を契機に】【日々の生活の中で】の4カテゴリーに分類された。 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 北尾美香、藤田優二、熊谷由加里、高野幸子、池美保、古郷幹彦、植木慎悟、藤原千恵子
20. デルファイ法を用いた国内の看護	共	2018年3月	第31回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会	看護師を対象とするデルファイ法を用いた国内文献の研究手順の実態について明らかにすることを目的とした。2017年6月に医学中央雑誌web版にて、キーワードを「デルファイ」として検索した結果、看護師を対象とするデルファイ法を用いた研究論文は29件が該当した。これらの文献を分析した結果、専門家集団の経験則から得られる価値観や評価、予測の指標について意見を集約して合意形成をすることを目的とした研究が多くみられた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 藤田優二、植木慎悟、北尾美香、前田由紀、藤原千恵子
21. 救急車要請の判断に影響を与える親の不確かさ尺度の基準	共	2018年3月	第31回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会（西宮）	親の不確かさが小児の不要不急な救急車要請の判断に影響を与える要因であることを不確かさ尺度（PUCAS）を用いて明らかにした。 本人担当部分：考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 植木慎悟、北尾美香、藤田優二、藤原千恵子、大橋一友
22. 母親が認識している小学生低学年の口唇裂・口蓋裂児の疾患に関連した否定的な体験術	共	2018年3月	第31回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会（西宮）	小学校低学年の口唇裂・口蓋裂児の母親が認識している児の学校での疾患に関連した否定的な体験とそれに対する母親の思いを明らかにした。医療者は親子と共にからかいへの対処方法を考えると同時に、教師の疾患への理解を深めるよう支援していく必要がある。 本人担当部分：データ収集と分析の妥当性の検討 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 北尾美香、藤田優二、植木慎悟、藤原千恵子
23. 小児科外来の看護師が認識する「保護者の外来への満足度」との関連要因	共	2017年9月	第27回日本外来小児科学会年次集会（津市）	小児科外来の看護師が認識する「保護者の外来への満足度」との関連要因について明らかにするため、小児科外来に勤務する看護師を対象に自記式の質問紙調査を行った。看護師が認識する保護者の満足度の平均は100点中57.8点であった。満足度と有意な相関があった要因は、診察までの待ち時間、医師と看護師間の人間関係、看護師間の人間関係、複数の検査がある場合は結果がでるまでの時間が長い検査から実施する、処置検査時のプレパレーションの実施などであった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、北尾美香、植木慎悟、藤原千恵子
24. 診療場面において小児科外来の看護師が診療や看護をスムーズにさせるために実施している判断や技術	共	2017年9月	第27回日本外来小児科学会年次集会（津市）	小児科外来の診療場面において、診療や看護をスムーズにさせるための看護師の技術を明らかにするため、看護師5名を対象に参加観察とインタビューを実施した。28コード、5サブカテゴリー、2カテゴリー【医師との協働】【スピーディーな行動】に類型化された。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：吉田陽子、藤田優二、北尾美香、植木慎悟、藤原千恵子、竹島泰弘
25. 採血場面において小児科外来の看護師が診療や看護をスムーズにさせるために実施している判断や技術	共	2017年9月	第27回日本外来小児科学会年次集会（津市）	小児科外来の採血場面において診療や看護をスムーズにさせるために看護師が行っている判断や技術を明らかにするため、看護師5名の参加観察およびインタビューを行った。25コード、7サブカテゴリー、2

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
26. 小児科外来の看護師が行っている診療や看護をスムーズにさせるための情報収集と情報共有の方法	共	2017年9月	第27回日本外来小児科学会年次集会（津市）	<p>カテゴリー【<b>確実な採血の実施</b>】、【<b>安心・安全な採血の実施</b>】に類型化された。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：植木慎悟、吉田陽子、藤田優二、北尾美香、藤原千恵子、竹島泰弘</p> <p>小児科外来の診療場面において、診療や看護をスムーズにさせるための看護師の技術を明らかにするために、看護師5名を対象に参加観察とインタビューを実施した。27コード、8サブカテゴリー、2カテゴリー【<b>情報の把握</b>】【<b>看護師間の情報共有</b>】に類型化された。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：北尾美香、植木慎悟、吉田陽子、藤田優二、藤原千恵子、竹島泰弘</p>
27. What to Do Until the Ambulance Arrives: Nursing Practices at Pediatric Outpatient Departments in Japan	共	2017年8月	2nd APNRC（台北）	<p>小児科外来で救急車が到着するまでに看護師が実施していることを明らかにするために質問紙調査を実施した。63名より回答があり、コードは27件あった。カテゴリーは「医療機器の準備」「患者の情報収集」「患者の事前受け付けをする」「医療者を呼んでおく」「実施マニュアルの掲示」などがみられた。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：藤田優二、植木慎悟、北尾美香、藤原千恵子</p>
28. 口蓋裂児に病気のことを話す時期や内容に関する父親と母親の認識	共	2017年5月	第41回口蓋裂学会学術集会（東京）	<p>口唇形成術や口蓋形成術後から小学校在籍までの子どもをもつ母親と父親を対象に、子どもに病気のことを話す時期や内容について、専門外来受診時に質問紙調査を行った。話している時期は3歳であった。話している内容については多岐に渡っていた。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：植木慎悟、熊谷由加里、北尾美香、松中枝理子、池美保、新家一輝、藤田優二、藤原千恵子</p>
29. 口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの母親が認識する「自身や子ども、家族にとって支えになったこと」	共	2017年5月	第41回口蓋裂学会学術集会（東京）	<p>口唇形成術や口蓋形成術後から小学校在籍までの子どもをもつ母親を対象に、闘病過程で「自身や子ども、家族にとって支えになったこと」を明らかにするために、専門外来受診時に質問紙調査を行い、自由記載項目に記載していた母親149名を分析した。「医療」「医療者」「家族」「自分自身」「友人・知人」「体験者間」の対応や存在が支えになっていた。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：熊谷由香里、北尾美香、松中枝理子、池美保、植木慎悟、新家一輝、藤田優二、藤原千恵子</p>
30. 口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの父親が認識する「自身や子ども、家族にとって支えになったこと」	共	2017年5月	第41回口蓋裂学会学術集会（東京）	<p>口唇形成術や口蓋形成術後から小学校在籍までの子どもをもつ父親を対象に、闘病過程で「自身や子ども、家族にとって支えになったこと」を明らかにするために、専門外来受診時に質問紙調査を行い、自由記載項目に記載していた母親80名を分析した。「医療者・病院のスタッフ」「医療」「家族」「同じ疾患の子どもを持つ親」「友人・知人」の対応や存在、「自分の考え・経験」「経済面」が支えになっていた。                      本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察                      担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能                      共著者名：北尾美香、熊谷由香里、松中枝理子、池美保、植木慎悟、新家一輝、藤田優二、藤原千恵子</p>
31. 口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの母親の育児に対する認識	共	2017年5月	第41回口蓋裂学会学術集会（東京）	<p>口唇形成術や口蓋形成術後から小学校在籍までの子どもをもつ母親を対象に、育児に対する認識を明らかにするために、専門外来受診時に質問紙調査を行い、自由記載項目に記載していた母親149名を分析した。「子どもの育ちへの期待」「子どもに対する感</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
32. 口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの父親の育児に対する認識	共	2017年5月	第41回口蓋裂学会学術集会（東京）	情」「疾患に対する感情」「家族に対する視点」「育児に対する親としての姿勢」がみられた。 本人該当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人該当部分の抽出は不可能 共著者名：藤原千恵子、北尾美香、松中枝理子、池美保、熊谷由香里、植木慎悟、新家一輝、藤田優二、
33. Challenges for Pediatric Outpatient Nurses		2017年3月	20thEAFONS	口唇形成術や口蓋形成術後から小学校在籍までの子どもをもつ父親を対象に、育児に対する認識を明らかにするために、専門外来受診時に質問紙調査を行い、自由記載項目に記載していた父親80名を分析した。「子どもの育ちへの期待」「子どもに対する感情」「疾患に対する感情」「家族としての視点」「育児に対する親としての姿勢」がみられた。 本人該当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人該当部分の抽出は不可能 共著者名：松中枝理子、北尾美香、松中枝理子、池美保、熊谷由香里、植木慎悟、新家一輝、藤田優二、藤原千恵子
34. The Current Status of Pediatric Outpatient Departments in General Hospitals in Japan	共	2017年3月	20th EAFONS	日本の総合病院における小児科外来の現状を明らかにするために 300施設の小児科外来に調査を実施した。1日あたりの小児外来患者の平均数は62.6人であり、平均待ち時間は36分であった。約76%がワクチンの投与と疾患の治療のために別々の時間帯を設けており、そのような施設では、待ち時間が有意に短かった。 本人該当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人該当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、北尾美香、植木慎悟、藤原千恵子
35. A Study on Pediatric Outpatient Nursing Techniques for Performing Medical Examinations Effectively and Smoothly.	共	2017年3月	20th EAFONS(香港)	小児科外来の看護師が医師の診察中にスムーズにさせるために実施している技術を明らかにするために、質問紙調査を実施した。63名より回答があり、コードは20件あった。カテゴリーとして「診察の準備」「患者間違いの防止」「子どもに安心感を与える配慮」「診察の介助」などがみられた。 本人該当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果 担当ページ：共同研究につき本人該当部分の抽出は不可能 共著者名：北尾美香、藤田優二、植木慎悟、藤原千恵子
36. 経験豊富な看護師のレスパイトケアにおける重症心身障がい児の個別性の把握方法	共	2017年12月	第37回日本看護科学学会学術集会（仙台）	重症心身障がい児がレスパイト目的で入院する施設の看護師9名を対象に経験豊富な看護師のレスパイトケアにおける重症心身障がい児の個別性の把握方法についてインタビュー調査を行った。【快適な状態を保つケア】、【合併症状に応じたケア】、【事故の出現を予測したケア】、【感情を読み取って応じるケア】、【発達を促すケア】を抽出した。 担当ページ：共同研究につき本人該当部分の抽出は不可能 共著者名：徳島佐由美、藤田優二、藤原千恵子
37. 口唇裂・口蓋裂児の小学校入学に伴う母親の不安	共	2017年12月	第37回日本看護科学学会学術集会（仙台）	口唇裂・口蓋裂児の就学の際に母親が抱えていた不安を明らかにするため、口唇裂・口蓋裂児の母親13名に半構造化面接調査を行い、母親が抱えていた不安は、21コード、6サブカテゴリーを抽出した。 担当ページ：共同研究につき本人該当部分の抽出は不可能 北尾美香、熊谷由加里、池美保、藤田優二、植木慎悟、藤原千恵子
38. The Prevalence of Fall-Risk Personality Traits Among Hospitalized Patients	共	2016年3月	19th EAFONS（千葉市）	小児の転倒・転落の危険因子のうち「危険の理解ができない」「行動が突発的で激しい」「親の言うこ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
lized Children Using Crib				とを聞かない」「親への後追いをする」の4つは転倒・転落の発生と有意に関連している。537名の小児を対象にこれらの性格の月齢、年齢別の該当率を調査した。「危険の理解ができない」は6か月から2歳までは90%以上が該当していた。「行動が突発的で激しい」は、1～1歳6か月が68%と最も高かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤原千恵子、植木慎悟
39. The Inter-rater Reliability of the Child-Fall Risk Assessment Tool for Pediatric Patients Using a Crib	共	2016年3月	19th EAFONS (千葉市)	サークルベッドを使用する小児用の転倒・転落リスクアセスメントツールの看護師間での信頼性を検証するために調査を行った。13名の看護師が2名同時に患児54名のアセスメントを行った。評価者間の信頼性を示すカッパ係数は「点滴スタンドを押しながら歩行する (1.0)」「男児 (0.96)」などが高かった。アセスメント結果のカッパ係数は0.85と高かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤原千恵子、植木慎悟
40. 夫婦間における口唇裂・口蓋裂児に関する認識と育児レジリエンスの比較	共	2016年12月	第36回日本看護科学学会学術集会 (東京)	口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの両親である夫婦間において、口唇裂・口蓋裂に関する認識やレジリエンスの程度に違いがあるかを明らかにするために、専門外来受診時に質問紙調査を行い、両親64組を分析した。CLPに関する認識では、将来への心配に関する2項目、および自らを責める2項目において母親の得点が有意に高かった。育児レジリエンス尺度の「問題解決力」と「受け止め力」において父親の得点が有意に高かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：植木慎悟、新家一輝、藤田優二、北尾美香、松中枝理子、藤原千恵子
41. 母親の口唇裂・口蓋裂をもつ子どもに関する認識と医療者への期待と実際－裂型別での比較－	共	2016年12月	第36回日本看護科学学会学術集会 (東京)	母親の口唇口蓋裂児に関する認識について児の裂型別で比較し、差異を明らかにするため、母親235名を対象に質問紙調査を実施した。裂型別で比較した児に関する認識は17項目中4項目において裂型別に有意差がみられた。裂型に直結した機能上の問題が関連していることが考えられる。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：新家一輝、藤田優二、植木慎悟、北尾美香、松中枝理子、藤原千恵子
42. 母親の口唇口蓋裂児に関する認識：発達段階別での比較	共	2016年12月	第36回日本看護科学学会学術集会 (東京)	母親の口唇口蓋裂児に関する認識について児の発達段階別で比較し、差異を明らかにするため、母親235名を対象に質問紙調査を実施した。発達段階別で比較した児に関する認識は17項目中7項目において発達別に有意差がみられた。児の発達に伴って不安や悩みが軽減する項目がある一方で、発達に伴って将来への心配が強くなる項目もみられた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、植木慎悟、新家一輝、松中枝理子、北尾美香、藤原千恵子
43. 総合病院の小児科外来の看護師が処置・検査中に実施している診療や看護をスムーズにさせるための技術・工夫	共	2016年11月	日本看護学会：ヘルスプロモーション(津市)	小児科外来の看護師が、処置・検査中に実施している診療や看護をスムーズにさせるための技術・工夫について明らかにするために小児科外来に勤務する看護師を対象に調査を行った。63名より回答があり、記録単位は計105件、コード数は45件であった。カテゴリーとして「デストラクションの実施」「プレゼンテーションの実施」「処置検査時は保護者同伴で実施」などが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、北尾美香、植木慎悟、藤原千恵子
44. 口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの母	共	2016年11月	日本看護学会：ヘルス	口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの母親の医療者への期

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
親の医療者への期待と実際に受けた支援			プロモーション（津市）	待と実際に受けた支援の内容を明らかにし、今後さらに充実すべき支援への示唆を得るために、母親235名を対象に質問紙調査を実施した。医療者への期待・実際に受けた支援ともに「治療や手術について、親が理解しやすいように説明してくれること」、「手術を受けるまでの哺乳・離乳食などの具体的な助言をしてくれること」、「手術後の注意や食事などの具体的な助言をしてくれること」の項目が上位3つに上がった。また、医療者への期待と実際に受けた支援の差については、ほとんどの項目で期待通りとした割合が一番多かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：北尾美香、松中枝理子、池美保、熊谷由加里、植木慎悟、新家一輝、藤田優二、石井京子、藤原千恵子
45. 口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの父親の医療者への期待と実際に受けた支援	共	2016年11月	日本看護学会：ヘルスプロモーション	口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの母親の医療者への期待と実際に受けた支援の内容を明らかにし、今後さらに充実すべき支援への示唆を得るために、父親235名を対象に質問紙調査を実施した。医療者への期待・実際に受けた支援ともに「治療や手術について、親が理解しやすいように説明してくれること」、「手術を受けるまでの哺乳・離乳食などの具体的な助言をしてくれること」、「手術後の注意や食事などの具体的な助言をしてくれること」の項目が上位3つに上がった。また、医療者への期待と実際に受けた支援の差については、ほとんどの項目で期待通りとした割合が一番多かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：松中枝理子、北尾美香、池美保、熊谷由加里、植木慎悟、新家一輝、藤田優二、石井京子、藤原千恵子
46. 看護師が認識する「入院中の小児の転倒・転落について困っていること」、第46回日本看護学会抄録集	単	2015年9月9日	第46回日本看護学会抄録集：看護管理（福岡市）	看護師が認識する「入院中の小児の転倒・転落について困っていること」について明らかにするため自記式質問紙調査を行い、61名より回答があった。内容分析で分析した結果、40のコードがあり、「家族からの協力が困難」「システムの不備」「子どもからの協力が困難」「ハード面の不備」「医療者の意識の低さ」の5つのカテゴリーに分類できた。
47. 小児病棟に勤務する看護師が摂食障害の患児に陰性感情を抱いた経験とその対処行動	共	2015年7月25日	日本小児看護学会第25回学術集会（千葉市）	小児病棟の看護師22名を対象に、摂食障害の患児と関わる中で陰性感情を抱いた経験とその対処行動について明らかにすることを目的として調査を行なった。陰性感情を抱いた具体的な場面は、「患児が食事を捨てていたことが発覚した時」、「患児が無断で病棟外へ出た時」などがみられた。対処行動としては「他の医療従事者に伝えた」「主治医に報告した」などがみられた 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：湯浅真裕美、藤田優二、石原あや、藤井真理子
48. 入院児が歩行中に転倒した際のインシデントレポート報告の要否に関する看護師の判断	共	2015年12月5日	第35回日本看護科学学会学術集会抄録集（広島市）	看護師は小児が転倒をした際にインシデントレポートの要否についてどのように判断しているかを明らかにするため調査をおこなった。看護師145名より回答があり、「外傷により処置をした」「外傷により検査をした」場合に必要という回答が多く、「家族のみの状況」よりも「看護師がそばにいた状況」で必要という回答が多かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優二、藤原千恵子、植木慎悟
49. 口唇裂・口蓋裂の専門医療機関における母親への看護実践の質的分析－看護師の実践とそれを支える要因－	共	2015年11月7日	第46回日本看護学会抄録集：ヘルスプロモーション（富山市） p217	口唇裂・口蓋裂の専門病院の経験豊かな看護師11名を対象とした面接調査を質的記述的分析を行い、看護実践の内容と実践する上で認識している問題を明らかにした。 本人担当部分：結果、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤原千恵子、松中枝理子、池美保、西尾善子、新家一輝、高島遊子、植木慎悟、藤田優二、北尾美香、石井京子



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
50. Are All Falls Involving Hospitalized Children Filed as "Incident Reports"?	単	2014年9月	Asia-Pacific Nursing Research Conference2014 (台湾, 台北)	看護師は小児が転倒・転落をした際にインシデントレポートの要否についてどのように判断しているかを明らかにするため調査をおこなった。看護師46名より回答があり、インシデントレポートの報告率は、転倒が56%、ベッドからの転落は80%であり有意差がみられた。また、外傷がない場合では転倒よりもベッドからの転落で多くインシデントレポートが報告される傾向がみられた。
51. 成人用ベッドを使用する小児用の転倒リスクアセスメントツール第3版の妥当性の検討	共	2014年8月	第18回日本看護管理学会学術集会(松山市)	成人ベッドを使用している小児641名を対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第2版を使用した。その結果をもとに改良したアセスメントツール第3版を作成し、第2版のデータを適応させた。成人ベッド用アセスメントツール第3版の妥当性を示す感度は1.00、特異度は0.49、AUCは0.91であった。本人担当部分:データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ:共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名:藤田優一、藤原千恵子
52. サークルベッドを使用する小児用転倒・転落リスクアセスメントツール第3版の妥当性の検討	共	2014年8月	第18回日本看護管理学会学術集会(松山市)	サークルベッドを使用している幼児697名を対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第2版を使用した。その結果をもとに改良したアセスメントツール第3版を作成し、第2版のデータを適応させた。サークルベッド用アセスメントツール第3版の妥当性を示す感度は0.78、特異度は0.76、AUCは0.83であった。本人担当部分:データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ:共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名:藤田優一、藤原千恵子
53. 成人用ベッドを使用する小児用の転倒リスクアセスメントツール第3版の妥当性の検討	共	2014年8月	第18回日本看護管理学会学術集会(松山市)	成人ベッドを使用している小児641名を対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第2版を使用した。その結果をもとに改良したアセスメントツール第3版を作成し、第2版のデータを適応させた。成人ベッド用アセスメントツール第3版の妥当性を示す感度は1.00、特異度は0.49、AUCは0.91であった。本人担当部分:データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ:共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名:藤田優一、藤原千恵子
54. Validation of the Second Edition of the Child-Fall Risk Assessment Tool for Pediatric Patients Using Adult-sized Beds	単	2014年7月	Pediatric Nursing 30th Annual Conference (アメリカ合衆国、ワシントンDC)	成人用ベッドを使用する小児患者用の転倒・転落リスクアセスメントツール第2版の妥当性を明らかにするために、2012年10月から2013年3月にかけて10病棟に入院した成人用ベッドを使用する小児641名を対象に前向きコホート調査を行った。アセスメント回数は計1,094回であり、アセスメントツールの感度は0.92、特異度は0.75、ROC曲線下面積は0.91であった。
55. Validation of the Second Edition of the Child-Fall Risk Assessment Tool for Pediatric Patients Using Cribs	単	2014年7月	Pediatric Nursing 30th Annual Conference (アメリカ合衆国、ワシントンDC)	サークルベッドを使用する小児患者用の転倒・転落リスクアセスメントツール第2版の妥当性を明らかにするために、2012年10月から2013年3月にかけて10病棟に入院したサークルベッドを使用する小児697名を対象に前向きコホート調査を行った。アセスメント回数は計1,315回であり、アセスメントツールの感度は0.78、特異度は0.73、ROC曲線下面積は0.81であった。
56. 入院児の転倒・転落防止対策:デルファイ法による検討	共	2014年12月	第34回日本看護科学学会学術集会(名古屋)	小児看護を実践する看護師よりコンセンサスの得られた「小児の転倒・転落を防止するために実施すべき対策」について明らかにするため3段階のデルファイ法の調査を行った。90名より回答があり、小児に対しての対策8項目、家族に対しての対策16項目、環境に対しての対策5項目、病棟全体での取り組み6項目の計35項目の対策を明らかにした。本人担当部分:データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ:共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名:藤田優一、新家一輝
57. デルファイ法の参加者数に関する検討	共	2014年12月	第34回日本看護科学学会学術集会(名古屋)	デルファイ法の適切な参加者数について検討するため調査を行った。3段階のデルファイ法を実施し、結果の一致度を算出した。その結果、参加者数が18名以上であれば中等度以上の一致度を示していたことから、参加者数は18名以上でデルファイ法の結果の質は保証されることが示唆された。本人担当部分:データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 担当ページ:共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
58. 小児用転倒・転落防止プログラム第2版に対する看護師の意見—小児と家族用の転倒・転落防止DVDとパンフレットについて—	共	2013年9月	第44回日本看護学会：小児看護（宇都宮市）	共著者名：藤田優一、新家一輝 入院している小児の転倒・転落防止プログラム第2版の転倒・転落リスクアセスメントツールC-FRATの改善に向けた課題およびその効果を明らかにすることを目的に、プログラムを実施した看護師252名を対象に調査を行った。103名より回答があり、アセスメントツールの予測精度は高いと回答した看護師は51.4%であった。また、アセスメントツールは使いやすいとの回答は60.8%、転倒・転落の防止に有効という回答は63.5%であった。 本人担当部分：データ収集、分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、菟野朱美、平山和代、藤原千恵子
59. 産後4か月の乳児をもつ父親の夫婦関係満足度に関連する要因	共	2013年9月	第44回日本看護学会：母性看護（岡山市）	産後4か月の乳児をもつ父親を対象に、夫婦関係満足度に関連する要因について調査を行った。735名より回答があり、父親の夫婦関係満足度得点の平均値は21.4、中央値は22.0であった。夫婦関係満足度と有意な正の相関がみられた要因は、「対児感情：接近」などの3項目であった。有意な負の相関は「仕事のストレス」などの2項目であった。夫婦関係満足度得点が高いほど有意に高かった要因として「パートナーとの関係のことで相談できる人」がいる、「父親の産後うつ状態」など10項目であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、西村明子、勝田真由美、石原あや、末原紀美代、大橋一友
60. 成人ベッド・学童ベッド用転倒リスクアセスメントツール：C-FRAT2第2版の危険因子と転倒発生との関連	共	2013年7月	日本小児看護学会第23回学術集会（高知市）	成人ベッド・学童ベッドを使用する小児298名を対象として、転倒リスクアセスメントツール：C-FRAT2第2版の危険因子と転倒発生との関連について調査した。アセスメント回数は計517回であり、「転倒または転倒の危険」の有無と危険因子の有無の関連をフィッシャーの正確確率検定にて分析し、「下肢の筋力低下」や「睡眠剤の使用」など12項目の危険因子に有意な関連がみられた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果 共同発表者：湯浅真裕美、藤田優一、二星淳吾、藤原千恵子
61. サークルベッド用転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT1第2版の危険因子と転倒・転落発生との関連	共	2013年7月	日本小児看護学会第22回学術集会（高知市）	サークルベッドを使用する小児342名を対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT1第2版の危険因子と転倒・転落発生との関連について調査した。アセスメント回数は計623回であり、「転倒・転落または転倒・転落の危険」の有無と危険因子の有無の関連をカイ2乗検定にて分析し、「身体症状が改善して活気が出てきた」や「行動が突発的で激しい」など12項目の危険因子と有意な関連がみられた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果 共同発表者：二星淳吾、藤田優一、湯浅真裕美、藤原千恵子
62. 入院している小児の転倒・転落防止対策における家族自己チェックの実施状況		2013年7月	日本小児看護学会第22回学術集会（高知市）	アセスメントツール：C-FRAT1第2版を用いて、転倒・転落防止対策の家族の実施状況について明らかにした。サークルベッドを使用する小児の家族342名を対象とし、転倒・転落防止対策の実施の有無について家族が自己チェックを行った。アセスメント回数は計623回であり、家族が転倒・転落防止対策を実施できていない割合は、「ベッドの上の整理整頓がされていないことがある」、「ベッド周囲の整理整頓がされていないことがある」が多かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、藤原千恵子
63. 小児用転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRATのROC曲線を用いたカットオフポイントの検討	共	2013年3月	日本看護研究学会第26回近畿・北陸地方会学術集会（和歌山市）	小児用転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT第1版の適正なカットオフポイントについて明らかにするため、幼児90名と、学童64名を調査対象として前向きコホート調査を実施した。当初は先行研究の結果よりカットオフポイントは最大得点の40%となる値に設定した（幼児用16点、学童用13点）。しかし、調査の結果、感度・特異度が最も高くなるカットオフポイントは、「幼児用」が13点（最大得点の32.5%）、「学童用」が6点（最大得点の17.6%）であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子
64. 小児の催眠剤、鎮静剤、麻酔剤使	共	2013年3月	日本看護研究学会第26	催眠剤、鎮静剤、麻酔剤使用後の転倒・転落に注意

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
用後の転倒・転落に必要な時間の指標：デルファイ法による調査			回近畿・北陸地方会学術集会（和歌山市）	が必要な時間の指標を明らかにするため、小児看護経験が5年以上の看護師52名を対象に2段階のデルファイ法を実施した。薬剤使用後の転倒・転落に注意すべき時間は、トリクロホスナトリウムシロップ3時間、抱水クロラール坐剤3時間、ミダゾラム6時間、チアミラルナトリウム4時間、全身麻酔手術の帰室後6時間であり、これらを薬剤の投与後に転倒・転落に注意すべき時間の指標とした。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優二、藤原千恵子
65. 産後4 か月の母親と父親のうつ状態の関連	共	2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会（大阪市）	産後4か月の母親と父親のうつ状態の有病率との関連を明らかにするためエジンバラ産後うつ病自己評価票を用いた調査を行った。735組の夫婦より回答があった（回収率37.1%）。うつ状態の母親は69名（9.8%）、父親103名（14.7%）であった。母親と父親の両方がうつ状態である夫婦が21組（3.0%）であり、母親と父親のうつ状態に関連がみとめられた。そのため、産後うつ病の支援は母親だけでなく夫婦をひとつの単位として支援していく必要性が示唆された。 本人担当部分：データ収集と分析、結果 共同発表者：西村明子、藤田優二、石原あや、勝田真由美、大橋一友
66. 小児用転倒・転落防止プログラム第2版のアウトカム	共	2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会（大阪市）	入院児の転倒・転落防止プログラム第2版のアウトカムを明らかにするため、プログラム実施前と実施中の転倒率および転落率の変化およびプログラムに対する看護師の意見について調査した。看護師103名より回答があり、「家族の転倒・転落防止の理解に効果がある」は86名（83.5%）とプログラムの実施は概ね効果があると支持されていた。10病棟に入院した小児は計3,501名であり、転倒率は実施前と実施中で有意差がなかったものの、転落率は実施中に有意に低下した。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優二、藤原千恵子
67. The relation between falls and preventive measures implemented by parents of pediatric patients	単	2013年10月	The 3rd World Academy of Nursing Science（韓国, ソウル）	サークルベッドを使用する小児患者697名を対象に、転倒・転落発生の有無と家族の転倒・転落防止対策実施の有無との関連について調査を行った。家族の自己チェックは計430回であった。家族が実施した対策のうち転倒・転落発生と有意な関連がみられたものは「小児が廊下や病室を走っている時に走らないように注意する」「スリッパではなく、滑りにくい靴を履かせる」「ベッドから離れる時は、ベッド柵を上げる」などであった。
68. Risk factors of Japanese mother's depression	共	2013年10月	The 3rd World Academy of Nursing Science（韓国, ソウル）	産後4か月の乳児をもつ母親を対象に、産後うつに影響を与える要因について調査を行った。産後うつの評価はエジンバラ産後うつ病自己評価票を用いた。735名の夫婦より回答があり、そのうち母親73名（10.1%）、父親103名（14.4%）が産後うつと判定された。母親の産後うつに影響を与える要因は「パートナーのことに相談できる人がいないこと」「夫の産後うつ状態」「対児感情：回避」「精神病の既往」「低い夫婦関係満足」であった。 本人担当部分：データ分析、結果 共同発表者：西村明子、藤田優二、石原あや、勝田真由美、大橋一友
69. 入院している学童用の転倒リスクアセスメントツール：C-FRATの危険因子と転倒・転落との関連	共	2012年7月	日本小児看護学会第22回学術集会（盛岡市）	学童66名を調査対象として、学童用の転倒リスクアセスメントツール：C-FRAT第1版の危険因子と転倒との関連について、前向きコホート調査にて検証した。入院中に1回でもハイリスクとなった小児は6名（9.1%）であった。転倒は0件、転倒の危険があったのは9件であった。「転倒の有無および転倒の危険の有無」と関連がみられた危険因子は「下肢の筋力低下」「下肢のリハビリテーション中」など9項目であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果 共同発表者：二星淳吾、藤田優二、湯浅真裕美、斎藤富美代、藤原千恵子
70. 入院している幼児用の転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRATの危険因子と転倒・転落との関連	共	2012年7月	日本小児看護学会第22回学術集会（盛岡市）	幼児90名を対象に、幼児用の転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT（Children Fall Risk Assessment Tools）の危険因子と転倒・転落との関連について、前向きコホート調査にて検証した。転倒・転落は6件、転倒・転落の危険があったのは10件の計16件であった。「転倒・転落の有無および転倒・転落の危険の有無」と関連がみられた危険因子は「男子」「2～3歳」などの12項目であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
71. 入院している小児と家族用の転倒・転落防止オリエンテーションDVDの有効性		2012年7月	日本小児看護学会第22回学術集会（盛岡市）	<p>、結果、考察 共同発表者：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、斎藤富美代、藤原千恵子</p> <p>入院している小児とその家族が転倒・転落防止について理解するための転倒・転落防止オリエンテーションDVD（以下、DVD）を作成し、その有効性についてアンケート調査を行った。小児の家族74名から回答があり、「分かりやすかった」が75.6%で最も多かった。転倒・転落防止に関する注意事項12項目は、DVD視聴後に理解度が有意に高くなっていた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果 共同発表者：湯浅真裕美、藤田優一、二星淳吾、斎藤富美代、藤原千恵子</p>
72. 入院している小児の転倒の危険因子：デルファイ法による調査	共	2012年3月	日本看護研究学会第25回近畿・北陸地方会学術集会（吹田市）	<p>入院している小児の転倒の危険因子について明らかにすることを目的として、小児看護経験が5年以上の看護師を対象に3段階のデルファイ法による調査を実施した。第1段階は看護師14名に半構成面接を行った。第2段階は看護師65名、第3段階では52名に対して質問紙調査を行った。明らかとなった転倒の危険因子は、年齢・発達4項目、性別1項目、性格・パーソナリティ9項目、疾患・症状・治療13項目、付き添い者の状況5項目、入院環境2項目の計34項目であった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子</p>
73. 小児が入院する際のベッド選択基準の現状	共	2012年3月	日本看護研究学会第25回近畿・北陸地方会学術集会（吹田市）	<p>小児が入院する際の、サークルベッドと成人用ベッドの選択基準の現状を調査した。252施設から回答があり、成人用ベッドを使用し始める年齢は「3歳以上4歳未満」（26.4%）と「4歳以上5歳未満」（28.2%）が多かった。年齢以外の基準として、発達（40.4%）、身長・体格（33.1%）、疾患・病状（13.2%）によりベッドが選択されていた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子</p>
74. 入院している小児への転倒防止対策と転落防止対策の実施状況	共	2012年10月	第43回日本看護学会学術集会：看護管理（京都市）	<p>入院している小児への転倒防止対策と転落防止対策について明らかにするため、看護師14名を対象に半構成面接を行った。次に明らかとなった転倒・転落防止対策をもとにアンケートを作成し、対策の実施状況を調査するため総合病院603施設を対象に横断調査を行った。半構成面接では転倒防止対策が14項目、転落防止対策が24項目が明らかとなった。横断調査は252施設より回答があり、転倒防止対策が30項目、転落防止対策は36項目が明らかとなった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子</p>
75. 小児との混合病棟に入院する成人患者の転倒・転落と入院環境との関連	共	2011年9月	第42回日本看護学会：成人看護Ⅰ（大阪市）	<p>小児との混合病棟に入院する成人患者の転倒・転落と入院環境との関連について調査を行った。136施設の混合病棟から回答があり、成人患者の転倒・転落率の平均は1.06（1,000患者日）であった。看護師1人あたりの病床数が多い施設では転倒・転落率が高かった。病棟内にプレイルームがある施設では転倒・転落率が低かった。小児患者と成人患者で一定期間担当チームを分けている施設では転倒・転落率が低かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子</p>
76. 入院している小児の転倒・転落の影響要因	共	2011年8月	日本看護研究学会第37回学術集会（横浜市）	<p>入院している小児の転倒・転落の影響要因を明らかにすることを目的として、小児が入院する病院603施設を対象に調査を行った。252施設より回答があり、転倒・転落率は平均1.36（1000 patient days）であった。転倒・転落率を低下させる影響要因として、平均在院日数が長いこと、転倒・転落ハイリスク患者の情報共有の実施、新人看護師の研修の回数が多いこと、患者家族へのパンフレットを用いたベッド柵の取り扱いについての説明などが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子</p>
77. 小児の転倒・転落リスクアセスメントツールの使用状況とその効果	共	2011年8月	第42回日本看護学会学術集会：小児看護（東京都文京区）	<p>小児に対するアセスメントツールの使用状況と転倒・転落率との関連について明らかにすることを目的として調査を行った。252施設の混合病棟から回答があり、小児にアセスメントツールを使用している施設は75.4%であったが、アセスメントツールの種類</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
78. 総合病院における小児の入院環境 －小児病棟と成人との混合病棟で の比較－	共	2011年7月	日本小児看護学会第21 回学術集会（さいたま 市）	<p>は小児専用が39.5%、成人と共通が60.5%であった。転落率はアセスメントツールを使用している施設で有意に低かったが、種類別では成人と共通のアセスメントツールを使用している施設の方が転落率は低かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>共同発表者：藤田優一、藤原千恵子</p> <p>全国の総合病院における小児の入院環境の実態を調査した。252施設より回答があり、小児病棟は116施設（46.0%）、混合病棟は136施設（54.0%）であった。小児病棟と混合病棟で有意差のあった項目は、総病床数、病床数、病床稼働率、平均在院日数とプレイルーム、学習室、院内学級、保育士の配置の有無であった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>共同発表者：藤田優一、石原あや、藤井真理子、藤原千恵子</p>
79. 総合病院における小児の家族の付 添いと面会の状況－小児病棟と成 人との混合病棟での比較－	共	2011年7月	日本小児看護学会第21 回学術集会（さいたま 市）	<p>全国の総合病院における小児の家族の付添いと面会の状況の実態について調査した。252施設より回答があり、小児病棟は116施設（46.0%）、混合病棟は136施設（54.0%）であった。小児病棟と混合病棟で有意差のあった項目は、付添い基準、面会の人数制限の有無、面会の年齢制限の有無とその年齢、付添いの割合であった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>共同発表者：石原あや、藤田優一、藤井真理子、藤原千恵子</p>
80. 入院している小児の転落の危険因 子：デルファイ法による調査	共	2011年12月	第31回日本看護科学学 会学術集会（高知市）	<p>入院している小児のサークルベッドからの転落の危険因子について明らかにすることを目的として、小児看護経験が5年以上の看護師を対象に3段階のデルファイ法による調査を実施した。第1段階は看護師14名に半構面面接を行った。第2段階は看護師65名、第3段階では52名に対して質問紙調査を行った。明らかとなった転落の危険因子は、年齢・発達6項目、性別1項目、性格・パーソナリティ10項目、疾患・症状・治療4項目、付き添い者の状況9項目、入院環境4項目の計34項目であった</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>共同発表者：藤田優一、藤原千恵子</p>
81. 成人との混合病棟における小児看 護に関する文献検討	共	2010年8月	日本小児看護学会第20 回学術集会（神戸市）	<p>成人と小児の混合病棟で実践されている小児看護の現状と問題点、および今後の課題を文献検討により明らかにすることを目的として調査を行った。対象文献は27件であり、混合病棟の入院環境に関する文献は6件、成人患者との関係に関する文献は6件、混合病棟の看護師の特性に関する文献は15件であった。小児病棟から混合病棟に移行した施設の看護師を対象とした縦断的研究、混合病棟への介入研究はされておらず、今後の課題が明らかとなった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>共同発表者：藤田優一、藤原千恵子</p>
82. 成人との混合病棟で小児看護を実 践する看護師の職務ストレス－小 児患者割合別での比較－	共	2009年10月	第40回日本看護学会学 術集会：看護管理（大 阪市）	<p>小児と成人の混合病棟の15施設に勤務する看護師130名を対象に、職務ストレス認知について調査した。小児患者主体の病棟の看護師（72名）と成人患者主体の病棟の看護師（58名）とで比較検討した。「難しい対象への関わり」と「看護師間の人間関係」の職務ストレス認知が小児主体群で有意に高く、「子どもに適した設備・備品」の職務ストレス認知が成人主体群で有意に高かった。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>共同発表者：藤田優一、藤原千恵子</p>
83. 小児看護を実践する看護師の属性 および個人特性と離職願望との関 連－病棟形態による分析と比較－	共	2008年8月	第34回日本看護研究学 会学術集会（神戸市）	<p>小児看護を実践する看護師240名を対象として、属性、個人特性、職務ストレスが離職願望に与える影響を明らかにすることを目的として調査を行った。小児病棟では、離職願望に対して家族同室割合は負の関連があり、夜勤回数、職務ストレス認知の「看護師間の人間関係」、コーピング特性の「回避と抑制」は正の関連がみられた。混合病棟では、離職願望に対して小児看護経験年数、ホープ特性は負の関連があり、職務ストレス認知の「業務量」は正の関連がみられた。</p> <p>本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察</p> <p>共同発表者：藤田優一、藤原千恵子</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
84. 小児看護を实践する看護師の属性 および 個人特性と職務ストレス との関連—病棟形態による分析と 比較—	共	2008年7月	日本小児看護学会第18 回学術集会 (名古屋 市)	小児看護を实践する看護師の職務ストレス認知に与える影響について明らかにするため、240名(小児病棟110名、混合病棟130名)を対象に調査を行った。小児病棟では「医師との関係」の職務ストレス認知にホープ特性が影響を与えており、「看護師間の人間関係」などの複数の職務ストレス認知に夜勤回数が影響を与えていた。混合病棟では「子どもとの関わり」「業務量」などの職務ストレス認知にコーピング特性が影響を与えていた。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子
85. 夜勤形態による小児看護を实践する 看護師の職務ストレス認知の違い— 病棟形態ごとの比較—	共	2008年10月	第39回日本看護学会学 術集会：看護管理 (熊 本市)	小児看護に携わる看護師238名を対象に小児看護師の職務ストレス尺度による調査を行い、病棟形態ごとに夜勤形態別(2交代と3交代)の比較を行った。小児病棟では2交代群で2項目の職務ストレス認知が有意に低く、3交代群で1項目が有意に低かった。混合病棟では2交代群で3項目の職務ストレス認知が有意に低かった。 本人担当部分：データ収集と分析、はじめに、方法、結果、考察 共同発表者：藤田優一、藤原千恵子
86. 地震災害長期における被災者の精神 健康度と援助	共	2002年8月	日本災害看護学会第5回 年次大会 (岩手県)	阪神淡路大震災後に災害復興住宅での住民181名にGHQ30とストレス状況などについてアンケート調査を行った。被災後6年経過した後も個人の慢性的なストレスは大きく、特に男性に精神的問題を抱える者が多数おり、精神面での援助の必要性が明らかになった。 本人担当部分：データ収集と分析、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 大野かおり、能川ケイ、中野智津子、池田清子、山本靖子、細見明代、松田悟、中西こずえ、藤田優一、
87. 災害復興住宅で暮らす住民の健康 と生活を支える援助 ソーシャル ・サポートの活用状況と生活の 実態	共	2001年6月	日本災害看護学会第3回 年次大会 (神戸市)	阪神淡路大震災後に災害復興住宅で暮らす住民57名を対象に構成的面接調査を行った。 63.2%が自覚する症状や治療中の疾患を有していた。ソーシャル・サポートについては平均して、1~2のサポートを活用していた。復興住宅に入居して、辛かったことがあったのは47.4%があったと答えているが、ソーシャル・サポートの活用認識が多い者ほど、辛かったことがあると答えた者の割合が多い傾向にあった。 本人担当部分：データ収集と分析、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 大野かおり、能川ケイ、中野智津子、山本靖子、池田清子、細見明代、太田深雪、松田悟、中西こずえ、藤田優一
88. 住宅復興における高齢住民の生活 と健康 5回目の追跡調査より	共	2001年6月	日本災害看護学会第3回 年次大会 (神戸市)	阪神淡路大震災後に仮設住宅に暮らしていた高齢住民31名を対象に半構成的面接を行った。 ソーシャル・サポートについては増加傾向にあり、GHQ30については高得点者群が38.7%と高率にみられた。女性に疾病がある人、健康観が良くない人への精神的ケアのアプローチが必要である。 本人担当部分：データ収集と分析、考察 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 池田清子、山本靖子、中野智津子、能川ケイ、大野かおり、細見明代、松田悟、松田こずえ、藤田優一、
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術 (建築模型等含む) ・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 科学研究費補助金「基盤研究C」	共	2016年4月～ 2020年3月	テーマ：「小児科外来における看護実践の暗黙知の解明とSECIモデルを活用した学習方法の検証」助成金：4,550千円	小児科外来の看護師が暗黙的に実践している「診療や看護をスムーズにさせるための知識・技術」を、知識変換の過程であるSECIモデルを用いて形式知へ変換し、学習用の動画とパンフレットを作成して外来看護師へ講習を行い、その効果を検証する。現在は、アンケート調査によって、小児科外来の現状の調査を行なっている。 共同研究者：藤田優一 (研究代表者)、藤原千恵子、植木慎悟、北尾美香

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
2. 科学研究費補助金「基盤研究C」	共	2014年4月～ 2019年3月	テーマ：「口唇口蓋裂 児の親のレジリエンス の解明と育児困難への 前向き育児プログラム による介入」助成金：4 ,680千円	口唇口蓋裂をもつ子どもの親を対象に、育児レジ リエンスと困難感に関する質問紙調査を現在実施して いる。今後は、育児の困難な親に対するトリプルP 講習会を開催し、その有効性を検証する予定である 。 本人担当部分：データ収集、分析 共同研究者：藤原千恵子（研究代表者）、藤田優二 、宮野遊子、新家一輝
3. 科学研究費補助金「学術研究助成 」（若手研究B）	単	2012年4月～ 2015年3月	テーマ：「入院してい る小児の転倒・転落防 止プログラム改訂版の 作成とその効果の検証 」助成金：4,160千円	転倒・転落リスクアセスメントツールの使用と、DVD ・パンフレットによるオリエンテーション、リスク に応じた対策から構成される転倒・転落防止プログ ラム第2版を平成24～25年に10病棟の入院児1,338名 に実施した。サークルベッド用アセスメントツール 第2版は、転倒・転落の発生を有意に高めた危険因子 は15項目であった。予測精度であるAUCは0.81、感度 は0.78、特異度は0.73であった。第2版の結果をも とに作成した第3版のAUCは0.83～0.84であった。プロ グラムの実施以前とプログラムの実施中の6か月間の 転倒・転落率（単位は1,000患者日）を比較した結果 2.06から1.53へと有意に減少した。
4. 科学研究費補助金「基盤研究C」	共	2012年4月～ 2015年3月	テーマ：「父親・母親 に対する産後うつ病予 防統合プログラムの開 発」助成金：5,330千円	生後4か月児を持つ父親と母親2,032組を対象に平成2 5年1月～4月の期間に自己記入式質問紙調査を行った 。867組(42.7%)を分析し、14.9%の父親、10.6%の 母親がうつ状態であり、5人に1人の乳児がうつ状態 の親に養育されていたことがわかった。母親のうつ の関連要因としては、育児の相談者がいないこと、 子どもの病気、パートナーがうつ状態、望まない妊 娠などであった。また、父親のうつの関連要因とし て、経済的な不安、不妊治療、パートナーがうつ状 態、仕事のストレスなどであった。また、うつ状態 の親は子どもに否定的な感情を持つ傾向がみられた 。現在はこれらの結果にもとづいたプログラムを構 築中である。 本人担当部分：データ収集、分析 共同研究者：西村明子（研究代表者）、藤田優二、 石原あや、大橋一友、勝田真由美、末原紀美代
5. 科学研究費補助金「学術研究助成 」（若手研究B）	単	2010年4月～ 2012年3月	テーマ：「入院する小 児の転倒転落リスクア セスメントツールの作 成とその効果に関する 研究」助成金：1,040 千円	小児用の転倒・転落リスクアセスメントツールを作 成するために、デルファイ法の調査を実施した。転 倒の危険因子34項目と転落の危険因子34項目を明ら かにし、小児用転倒・転落リスクアセスメントツ ール（C-FRAT）を作成した。小児が入院する病院252施 設の横断調査により、転倒・転落率の低下に効果 があると考えられる防止対策を明らかにした。これら の調査結果より、小児用の転倒・転落防止プログラ ムを作成し、小児が入院する6病棟で6ヶ月間実施し た。入院患者の10.5%を対象に実施した。転倒・転 落率に変化はなかったが、転倒・転落と関連のある アセスメントツールの危険因子と、そのアセスマ ントツールの妥当性について明らかにすることができ た。
6. 平成22年度兵庫医療大学学内研究 費助成	単	2010年10月 ～2011年3月	テーマ：「入院してい る小児の転倒・転落事 故防止家族用オリエン テーションビデオの作 成」助成金：200千円	デルファイ法による調査により、小児の転倒・転落 の危険因子を明らかにした。その結果をもとにイラ ストの作成を依頼し、親しみやすいアニメーション 形式の転倒・転落防止に関するオリエンテーションD VDとパンフレットを作成した。入院した小児の家族 がDVDを視聴した後にアンケートに回答してもらい、 転倒・転落防止に関する注意事項12項目全てにおい て視聴前よりも視聴後で有意に理解度が高くなって いた。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2019年10月～現在	日本看護科学学会 査読委員
2. 2018年9月～現在	日本小児看護学会 専任査読者
3. 2017年9月	第48回日本看護学会慢性期看護学術集会口演発表座長
4. 2017年5月	第48回日本看護学会慢性期看護学術集会抄録選考委員
5. 2017年3月	日本看護研究学会 第31回近畿・北陸地方会学術集会実行委員
6. 2011年3月	日本看護研究学会 第25回近畿・北陸地方会学術集会示説発表座長
7. 2010年6月	第20回日本小児看護学会実行委員
8. 2010年12月	第8回日本小児がん看護学会実行委員